

二次元ドリームノベルズ

18
未 満



サンダークラップス! リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

ウォッチランド

羽沢向一
挿絵: 緑木邑

Contents

第一章
異世界に転生したら
ヒーローから勇者
004

第二章
恐怖に犯される
037

第三章
異世界勇者の
絶頂パレード
094

第四章
雲霞をなす陵辱
114

第五章
体液まみれの正義
143

スターサンダー

Star thunder

スーパーヒーローチーム
「サンダークラッパス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血
のミュタント。
電気を自在に操る能力を持つ。



ローズデバイス Rose Device

「サンダークラッパス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷を負い、
体内にナノマシンを入れている。
今作では機械の甲冑「アレイアグレース」を装着して
闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラッパス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美女。
南米の自然の精霊たちに認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿し
てジャガーの獣人に変身して魔法
を使う。



フレア

Flare

「サンダークラッパス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ダーに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

ウォッチランド

Watch Land

巨大な城壁に囲まれた異世界の町。
来る災厄に対抗するため、ローズデバイ
スはここに勇者として召喚された。

サンダークラッパス! リボーン
CHARACTERS ウォッチランド









目次

第一章	異世界に転生したらヒーローから勇者
第二章	恐怖に犯される
第三章	異世界勇者の絶頂バレード
第四章	雲霧をなす隠弊
第五章	体液まみれの正義

第一章 異世界に転生したらヒーローから勇者

北原静子は銀座のカラス工品の老舗店の中を、時間をかけて歩いた。
お気に入りの水色のワンピースに白い靴。左手には、いつものように若い娘にはあまり似合わない黒いアタッシュケースの取っ手をしっかりと握っている。
今日はひとりで自分の部屋に飾る花瓶を買いに来たのだが、目的の花瓶だけでなく様々なカラス工品の華やかな様子を目移りしてしまっ

た。

（花瓶の他にも、なにか買おうかしら）
私室には仕専用の電子機器と生活必需品しか置いていないのだが、カラス工品には幼いころから心が引かれる。コレクター気質ではないので、部屋に飾っておくのは二三個だからこそ、しっかりと選んで買いたい。
總に並ぶ精なカラス工品のライオンや象など、アフリカの動物をなめる。
（ベルさんなら動物の置物を運ぶよね、あたしはこれ）
足が止まったのは、透明な大小の直方体をいくつも組み合わせたオブジェの前。同居している三人からはよくわからないと言われるが、異象作品よりも抽象作品が好みだ。
（ちよつと値段が高い、でも欲しい……）

財布にあるクレジットカードを使えば簡単に支払える値段だが、高額商品をホイホイ買うことには抵抗がある。脳内で数秒の躊躇をした後に、静子は決意した。
「よし、買っちゃおう」
店員に声をかけようとしたとき、脳に警報が響いた。静子の脳は、静子の意識とは別に無数に飛び交う電子情報の中から必要なものを選び出して、意識に知らせてくる。意識にいくつものツイッターやLINEの画面が現れる。
（銀座で交通事故が起きてる）

個人のスマートフォンがSNSにあけている情報なので、場所の判定ができない。静子はワンピースのポケットから四角いプラスチック製のサブリースを出し、店内の人たちから見えないように蓋を開けた。中に整列しているのはサブリースでも案でもない、デントウムサイズの小さな機械がいくつに飛び立ち、人間の視力では捉えられないスピードで店舗の外へ出ていく。
道路に出た機械の虫たちはバラバラに分散して、銀座のあちこちを飛びまわり、映像と音声を集めて静子の脳へ送ってくる。
一分もかからずに、虫の一匹が事故現場を発見した。大型トラレーが横倒しになり、斜めになった両台のコンテナが白い乗用車を押しつぶしている。トラレーのドライバーが自力で車外へ逃げ出し、道路で呆然と立ちくしている姿も見えた。しかし乗用車のひしゃげた車内では、中年女性が外へ出ようと必死にうっているが、歪んだドアを開くことができない。
事故車に集まった虫たちからの情報で、位置は把握した。

静子は急いで店内の奥にあるトイレに駆けこむと、個室の中で速力でワンピースを脱いだ。かわいいうんぴーすの下からは、身体にびつたりと密着する黒いボディスーツが現れる。
アタッシュケースを使役の閉じた蓋の上に置くと、指でなく脳からの指示でロックを解除した。ひとりで開いたアタッシュケースの中から、エメラルド色に輝く金属片が飛び出し、自動で静子の全身に貼りつき覆いつくす。
数秒で、北原静子はエメラルドグリーンに輝くハイテク装甲服を装着したスーパーヒーロー、
（コズチューム）
二十歳のハイティーンにしては小柄で華やかな静子の身体を包みこみ、全層で成熟した大人の女のボディラインを美しく包みこんでいる。誰も大人の女性をイメージした仮面に隠す。体形が異なるのは正体を消すためだが、おかげで世間では
ローズバイスとは二十代なかばの美女というイメージを持たれていた。

脳から自分の機械に直接命令を出せる静子は、オフビートだ。
オフビートとは世界中にいる人間以上の、あるいは人間とは異なる力を持つ者たち。
冷戦時代に、テロリストがアメリカへ向けて発射した核ミサイルを、ひとりの男が空を飛んで素手で捕まえ、宇宙まで運び、大勢の人々の生命を救った。
赤いコズチュームを着て、赤いマスクを被り、赤いマントをひるがえした超人は露骨のごとく集まった記者たちへ、友人たちから「スーパーマン」と呼ばれていると自己紹介した。

スーパーマンの出現が契機となって、世界中で超人たちが姿を現はしめると、人々は最初のひとりにならって超人たちをオフビートと呼んだ。
オフビートの出自や能力は多種多様だった。生まれながらに超能力を持つ者、アクシデントでスーパーパワーを得てしまった者、努力して驚異の秘術や魔法を身につけた者、最初から人間ではない口ポットや伝説の魔物や宇宙人などだ。
オフビートは三つに分類できる。
オフビートであることを隠して、平凡に暮らす者たち。

超能力を使って犯罪をするスーパーウィランたち。
そしてスーパーオフビートのように人命救助や犯罪者と闘うスーパーヒーローたち。
北原静子もスーパーヒーローのひとりだ。
静子は幼いころに、優秀な科学者だった父の研究中の事故に巻き込まれて、次第に脳と神経が破壊する前兆的な症状を発症した。陸軍に迫る死から命を護るために、父親は自分が開発していた特殊なナノマシンを体内に注入して、娘の神経系を肩代わりさせた。静子の脳と神経は徐々にナノマシンに入れ替わっていき、やがて脳は完全にナノマシンの集合体となった。記憶や人格がナノマシンの脳に完全に引き継がれているのは奇跡といつてよい。

静子は身体が生身で、脳が機械、という他に類のないサイボーグとなった。
父親の死後、静子は若い女性三人の新人ヒーローチームのサンダークラブと出会い、身を寄せた。そして自分が開発したアーマーを装着して、サンダークラブの四人目のメンバーとなり、ローズバイスというヒーローネームを名乗った。
ローズバイスは身軽な動きでトイレの窓から外に出ると、アーマーの替わりばんこにワンピースと靴を入れたアタッシュケースを持ち、脚部からジェットを噴射してビルとビルの間の狭い空間を垂直に上昇した。周囲のビルよりも高い空中でアタッシュケースを手から放すと、中から四つのプロペラが現れてローンを化して自律飛行を開始する。

着替えの入ったアタッシュケースを車中に待機させて、ローズデバイスは事故現場へと飛んだ。幸いにもトレーラーが横転しているのは、すぐ近くの道路だった。一分もかからず、つかれかけている乗用車の脇に降り立つ。被害者を安心させるために、空んだドアのウィンドウから車内を観きこんで声をかける。

スーパーヒーローチーム、サンダークラブスのローズデバイスです。今から救助しますので、心配しないで車内でじっとしてください。

声はアーマーを通して、静子本来の少女のような澄んだ声から、頼りがいのある力強い声響に変わっている。運転席に座るぼちゃやりの中年女性は、何度もニュースで活躍を報じられているヒーローの姿を見て、声を聞き、安堵で気の抜けた顔を大きくくすくすさせた。

「はじめにトレーラーをどかします」

ローズデバイスは周囲を飛びまわる機械の虫たちからの映像を脳で受信して、危険がないことを確認すると、金属の両手を乗用車の上のしかるコンテナに当せた。そのまま空中に浮かび、コンテナを押す。ローズデバイスのアーマーが出す腕力は、巨大な重機以上だ。難なくトレーラーを押上げて、浮き上がったいた片側のタイヤをアスファルトの路面に横かした。

中年女性のいない助手席側のドアの前立つと、右手をアーマーの脇腹部分に当てた、なめらかな表面が開き、中からボールペンサイズの細い円筒が出てきて、指にくっつく。円筒の先端を空んだドアへ向けると、高速で小刻みに振動する刃が出る。

「こちらのドアを切断します。安全ですが、念のために近づかないでください」

振動する刃がドアに触れると、包丁が言葉を切るようにやすやすと切断していく。ドアを車体からははずすと、両手を伸ばして中年女性のかなり重層のある身体を優しく引っぱり出して、道路に立たせた。

「けがはありませんか。すぐに救急車と警察が来ます」

救急車とパトカーが駆けつけてくる様子が、周囲に飛んでいる虫から送られてきている。

中年女性はなほ呆けた顔つきで、ローズデバイスの金属のマスクを見つめた。

「だ、大丈夫です。あの、スーパーヒーローを生で見るのは、はじめてで、ありがとうございます」

パトカーが到着して警官が降りると、ローズデバイスは中年女性とトレーラーのドライバーを交えて、事故と救助活動について報告した。

その間に野次馬がさらに集まって、スマートフォンで写真や動画を撮影しまくっている。ローズデバイスを呼ぶ声がいくつも重なって聞こえた。

「サンダークラブスのローズデバイスだ！」

「はじめて見たー」

「今日はひとなんだ」

「カッコいいー」

「こっちを向いてっ」

歓声を浴びるローズデバイスのアーマーの顔に変化はない。女の美貌をシンプルに造形したマスク部分には、表情を変える機能はない。しかしマスクの内側では、静子の顔が困惑していた。

「えっと、やっぱり、皆さんになにか言わなきゃ」

スーパーヒーローたちは事件を解決した後、集まった人々やマスコミに事件について話すことが多い。人々の不安を鎮めるため、ベテランヒーローになるためになる言葉をさりげなく言っている。サンダークラブスではそういう役は、いつもリーダーのスターサンダーの担当だ。

警官への報告が終わると、顔を人々へ向けた。

「ええっと、その……」

ローズデバイスは無意識に大きく息を吸って待てる。

「皆さん、安全運転をお願いします」

そう口走ってから、自分で突っこんだ。

「なんなの、それ!? もっと気の利いたことを言わなくては」

ナノマシンが構成する脳のデータベースを検索して、過去のヒーローたちのインタビュー映像を高速で再現していく。そして決めた。

「それでは、さようなら」

演説をあとにめて、アーマーを総機のように垂直に飛翔させた。

（ああダメダメ！ スーパーヒーローとしても上手くしゃべれるようにならなくてはいけない）

ビル街の上空に浮かぶアタッシュケースに右手を伸ばしたとき、声が聞こえた。

「勇者様」

「勇者様」

「お目覚めください、勇者様」

ふいに静子の耳にいくつもの声が入り、脳内に響いた。

（えっ？ なに？ あたし、まぶたを閉じてる……）

閉じた覚えないまぶたを開くと、目の前に顔が並んでいた。

ぼんやりとした視界に映るのは、見たことがない顔ばかり。全員が男。年齢は四十代以上から老人まで。ひとりとして記憶にない顔が、円陣を組むように並んで静子を見下ろしている。

「目を開けた！」

「目を覚ましたー！」

「勇者様が起きられたぞー！」

静子は大きく目を見開き、視界をクリアにする。

「……これは」

自分の声が聞えひいて聞こえる。喉の筋肉も、舌も、唇も、動きが重い。

「なに……」

自分が空を飛んでいるのではなく、硬く平らなものに横たわっていることに気づいた。急いで立ち上がったが、全身の筋肉も固まっていて、思ったように動かせない。まるで何日も眠っていたようだ。のろのろと体を起こして、ゆっくりと立ち上がったところで、あらためて自分がロースパイプのアーマーを装着していないことを認識した。

「アーマーを着けて、銀星の上空を飛んでいたはずなのに、どうして？」

自身の身体を見下ろすと、ガラス工芸店で着ていたライトブルーのワンピースと白い靴に戻っている。

「ケースもない！」

全身を包んでいたアーマーだけでなく、空中でふもつかわなくなったアタッシュケースの存在も感じ取れなかった。目に見えないだけではない。アーマーとアタッシュケースは常に静子のナノマシンと脳とアクセシしている。静子の意図に反して他人が触れたり、移動したりすると、自動的に静子の脳だけに警報を発する。しかし今はアーマーとアタッシュケースとの接続が途切れている。アーマーを失った静子にできることは、手足を動かして足の肉体のこわばりをほくすことだけ。そうしながら自分の周囲を観察した。

静子がいるのは、素朴な木造の四角い大きな部屋だった。手入れは行き届いているが、おしゃれなところはまったくない。百人以上は収容できる床には、木製の折り交わらない黒い長椅子がいくつも整然と並んでいる。静子には古いキリスト教の聖堂のように思えたが、室内に十字架もキリスト像も聖母像もなかった。そのかわり一方の壁の前に、奇妙な銅像が立っていた。身長が三メートルほどの、ヨーロッパの貴族らしい、立派だが、華美な装飾はない整った顔の男にまっとう四十代ほどの男の立像だ。肉体はたくましく、顔は優しい包容力を感じさせる。

ただ顔の左目の位置に、円形のアナログ時計がはまっている。長針が丸く並ぶ数字の12を、短針が9を指していた。静子を包囲している三十人あまりの男たちは、顔の造形も、聞こえてくる言葉も明らかに日本人だ。それなのに身に纏っている衣服が日本人ではない。というよりも現代人のものではなかった。ヨーロッパの歴史映画や異世界ファンタジー映画に出てくる町の平民の衣装に見えた。そして今も静子に向かって、勇者様、勇者様、と連呼してくる。

（もしかしてここはセッター、あたしは知らないうちにロールプレイングゲームの衣装イベントに連れてこられたのかしら。いえ、そんな馬鹿なことはない。非論理的も）

静子がかむ口陣の中から最年長らしい白髪に口紅の老人が進み出て、つやつやしくひざまずいた。顔の皺からあかるい微笑を神秘的な表情で抑えつけて、かすれた声を出す。

「勇者様、よくそれが町ウオッチャンドへおいでくださいました。わたくしはウオッチャンドの市長ゴドルフと申します。われわれの呼びかけにお応えくださったことを、心より感謝いたします。」

敬意をこめて述べる老人の言葉にも表情も、静子は悪意を感じ取れない。警戒心を残しながらも丁寧にあずけた。

「ここはウオッチャンドということなですか？」

老人が真摯な顔で応える。

「さようでございます。」

「あなたの御名前が本当にゴドルフですか？」

「もちろんです。勇者様にとりて敬を申せまじようか。」

「あの、失礼ですが、あなたも、他の人々も日本人に見えますが。」

「勇者様の世界では二ホンという国があるのかもしれないが、わたくしどもは存じ上げません。ここは自治都市ウオッチャンドです。」

ウオッチャンドは、静子が全然記憶にない名前だ。地球上に実在する国名でも地名でもないと思っ。

「でも、あなたたちの話している言葉も日本語です。」

「それは勇者様がウオッチャンドに召喚されたときに、互いに言葉が通じるようにされたのです。」

「えっ、っ、召喚と言いました？」

「はい。さようござ。」

日常生活ではまず聞くことも口にすることもない言葉を真剣に語る老人の顔を、静子はまじまじと見つめる。

「あたしを別の世界に召喚した、というのですか？」

「われら市民は聖なる守護者アングル・ウオッチに願いました。」

ゴドルフ市長は右手を上げて、壁際の銅像を指し示す。顔にアナログ時計をつけた人型が、この町の守護者といふことになる。

「近くウオッチャンドを襲う恐るべき災厄から護つていただけるように。アングル・ウオッチは市民の祈りを聞き届けくださり、異世界から勇者様を召喚されたのです。」

感極まって最後にはうわすった大声になった市長の言葉に、いよいよ恐怖は感じられない。それでも静子は素直には信じられなかった。

「そんなファンタジー小説みたいなことが実際に起きるなんて……」

サンダークラップスは過去に、パラレルワールドを自由に横断できるテクノロジを持つ種族の域に因われて、ユミエルという別の地球のスーパーヒーローと共闘したことがあった。なので別の世界が存在することは納得できる。

それでも勇者として異世界に召喚されるなどという事態は受け入れ難い。自分なぜか作られたセッターにいて、というわけが仮装 RPG イベントに放り込まれた、というほうがまだ信じられる。

だが、ひとりの事実が、ここが自分の知る日本の中ではないと告げていた。

（脳に通信がないと入ってこない。ネットに接続できない。ウオッチャンドには電波がないわ！）

現代の日本の、いや地球の人がたなくさんいる場所で、人工的な電波がまったくないのは考えられない。電子的静寂が、静子に自分が世界から切り離されたと感じさせる。

アーマーも情報も失ったなら、あたしにはなんの能力もない。脳をナノマシンと入れ換えたただの一般人なのに、異世界に召喚された勇者と言われても……」

ゴドルフ市長が立ち上がり、両手をふるって静子をかむ人の輪を左右に広げた。アングル・ウオッチの教会の中に、扉へとつつく道ができる。

「さあ、勇者様、教会の外で待つウオッチャンドの市民たちにも話を聞かせてあげてください！ おお、そうでした。わたくしはここが大切なことを忘れておりました。」

ドキッとして静子はあずけた。

「な、なんですか？」
「まだ勇者様の御尊名を受け賜わっておりません」
「それは……」

どうしてまだめらつてしまう。素性を隠して活動しているスーパーヒーローとしての反応だ。
この状況で、名前を明かしていいのかしら。でもここが異世界だしたら、この人たちはロースパイプを知らないから
決意して、本名を口にす。
「あたしの名前は静子です」

「ユドルフだけでなく周囲の人々がどうと満き上がった。」

「シズコ様！」

「シズコ様！」

「われらが勇者はシズコ様だあ！」

「さあ、シズコ様。外で市民たちが、勇者様をお待ちしております」

静子の右手、ユドルフが握った。何度もちがえされる自分の名前のなを、市長に先導されて、静子は前へ足を進めた。何人もの
男が我先に走って、木製の大きな扉を押し開く。

扉の外へ出た途端、大歓声が圧力となって押し寄せてくる。静子の目に入ったのは、教会の前の石畳の広場にぎっしりと集まった男
女の群衆。老人から両親に抱かれた赤ん坊まで、年齢もはらだが全員が日本人顔だ。

「勇者様！」

「勇者様！」

「勇者様が来くれた！」

「これでウォッチランドも安泰だ！」

さらにユドルフから静子の名が伝えられると、全員の中から連呼された。

「シズコ様！」

「勇者シズコ様！」

「シズコ様、われらをお救いください！」

「ウォッチランドを攫ってください、シズコ様！」

大勢の人々の言葉にあふれる希望の音色を、静子は鮮明に感じ取れた。スーパーヒーローとして事故や災害の現場で救助活動をする
ときに、何度か聞いた音色だ。この異常な状況にあつても、ウォッチランドの人々の言葉に嘘はないと思う。

でも、今のあたしが、どう応えてあげればよいのか……

自分に向けられる大きな期待に困惑しながらも、静子は冷静にウォッチランドを観察していた。群衆で埋まった広場の周囲には、木
造や石造りの家が並んでいる。どの家も平屋か二階建てで、アングル・ウォッチの教会が最大の建物だった。

見える限り、街のなかには、電線、街灯、自動車、列車、その他現代のテクノロジーを感じさせるものはない。やはり町全体が歴史
映画のセットのようにしか見えなかった。

しかし遠なる家並みの向こうには、リアル志向の歴史映画には有り得ないものがそびえ立っている。
城壁だ。

遠くて細部はよくわからないが、石造りの城壁が町をかこんでいる。城壁の中に町がある城郭都市は、ヨーロッパでは珍しくない。
現代にもいくつも残っている。だがウォッチランドの城壁はサイズが異常だった。正確なところはわからないが、静子は建物との比較
で目測しつつ歩いた。

「城壁の高さは六十メートルはある！」

有名な万里の長城の最も高い部分でさえ九メートル。現存する城郭都市のなかでも最大規模であるランスのカルカソンヌでも、城
壁は十数メートルの高さ。高さ六十メートルの垂直にそびえる城壁を建設する技術は、目の前のウォッチランドとは隔絶している。

（まるでオーバースタック）

静子は歓声をあげつつける市民たちへ、できるかぎり大声で叫んだ。

「ウォッチランドの皆さん、すみませんがお静かにお願いします。あたしの話を聞いてください！」

静子の精一杯の言葉は、あっさりと観衆の叫びにかき消されてしまう。

「あ、あの、皆さん、ちょっと……」

いつもは完全に素の自分を隠蔽しているからこそ、堂々とスーパーヒーローとしてふるまえる。素顔と素声でヒーローじみたあつ
かいをされるべきが来るのは、想像もしていなかった。

「お願いします。あたしの話を聞いてください！」

人生ではじめて機械で増幅しない大声を二度三度くりかえして、ようやく市民たちが鎮まってくれた。歓声のかわりに、偉大な救
世主からこんなありがたい言葉を賜われるのかという熱い期待の視線が、レザーの一番照射のこどく飛んでくる。静子は自分の頬が
赤く色づくのを自覚して、うわすった声を出してしまつた。

「あの、あたしは勇者として召喚されたんですが、事情がまつたかわからないんです。皆さんのお役に立つためにも、あたしはなん
のために召喚されたのか、具体的に説明してもらえないでしょうか」

静子の前で再び市民はざわつきはじめる。老若男女が顔を見合わせては、また視線を静子へ向けてきた。

（あつ、失聲されているみたい。勇者はなんでも知っていると扱われているのかしら）

今度はユドルフ市長が両手を広げて、民衆を制した。

「まあまあ、市庁舎の公文書庫にある記録によれば、代々の勇者も召喚されたときには何も知らなかったという、シズコ様も
いきなり大歓声が轟き、市長の弁舌がかき消された。」

静子は驚愕の声をあげる。

「あああ……」

静子の目に映る広場の群衆と立ち並ぶ家々の向こうで、凄まじい光景がくりひろげられた。そびえ立つ巨大城壁の一角が、内側へ向け
て崩壊している。いくつもの大きな石の塊が落下して、壁際に建家を押しつぶす。住民が広場に集まっつていなければ、下敷きになつて
死人が出たかもしれない。

見る間に城壁の崩壊が広がり、次々と家屋が粉砕されていく。六十メートルの巨壁の一部がりの字の形にえぐられた。

壁の向こう側から崩れた箇所を乗り越えて、黒いものが姿を現した。黒い蛇のように長く伸びた首。黒い胴体から生えた四本の脚。そして背中から広がる黒い翼。静子は印象を口にした。

最初に壁を乗り越えたものは、確かにドラゴンの姿。大きさはトラックほどもあるだろうが、だがその後につづく黒いものは、同じ大きさだが全身にトゲトゲが生えたクワガタムシに見える。さらに脚のある黒い怪鳥、二本の首をもたげた黒い大蛇、ねじれた角が生えた黒い狼のような獣。

怪物の群れの姿とともに、ナノマシン脳が今までウォッチランドに存在しなかった電波を検知した（ついでにハイパー）

後ろをふりかへた広邊の男も女も、老人も子供も、全身の血を押し取られたように蒼白な顔になり、悲鳴と怪物たちの名前をほとほとはしらす。

12345678910111213141516171819202122232425262728293031323334353637383940414243444546474849505152535455565758596061626364656667686970717273747576777879808182838485868788899091929394959697989910010110210310410510610710810911011111211311411511611711811912012112212312412512612712812913013113213313413513613713813914014114214314414514614714814915015115215315415515615715815916016116216316416516616716816917017117217317417517617717817918018118218318418518618718818919019119219319419519619719819920020120220320420520620720820921021121221321421521621721821922022122222322422522622722822923023123223323423523623723823924024124224324424524624724824925025125225325425525625725825926026126226326426526626726826927027127227327427527627727827928028128228328428528628728828929029129229329429529629729829930030130230330430530630730830931031131231331431531631731831932032132232332432532632732832933033133233333433533633733833934034134234334434534634734834935035135235335435535635735835936036136236336436536636736836937037137237337437537637737837938038138238338438538638738838939039139239339439539639739839940040140240340440540640740840941041141241341441541641741841942042142242342442542642742842943043143243343443543643743843944044144244344444544644744844945045145245345445545645745845946046146246346446546646746846947047147247347447547647747847948048148248348448548648748848949049149249349449549649749849950050150250350450550650750850951051151251351451551651751851952052152252352452552652752852953053153253353453553653753853954054154254354454554654754854955055155255355455555655755855956056156256356456556656756856957057157257357457557657757857958058158258358458558658758858959059159259359459559659759859960060160260360460560660760860961061161261361461561661761861962062162262362462562662762862963063163263363463563663763863964064164264364464564664764864965065165265365465565665765865966066166266366466566666766866967067167267367467567667767867968068168268368468568668768868969069169269369469569669769869970070170270370470570670770870971071171271371471571671771871972072172272372472572672772872973073173273373473573673773873974074174274374474574674774874975075175275375475575675775875976076176276376476576676776876977077177277377477577677777877978078178278378478578678778878979079179279379479579679779879980080180280380480580680780880981081181281381481581681781881982082182282382482582682782882983083183283383483583683783883984084184284384484584684784884985085185285385485585685785885986086186286386486586686786886987087187287387487587687787887988088188288388488588688788888989089189289389489589689789889990090190290390490590690790890991091191291391491591691791891992092192292392492592692792892993093193293393493593693793893994094194294394494594694794894995095195295395495595695795895996096196296396496596696796896997097197297397497597697797897998098198298398498598698798898999099199299399499599699799899910001001100210031004100510061007100810091010101110121013101410151016101710181019102010211022102310241025102610271028102910301031103210331034103510361037103810391040104110421043104410451046104710481049105010511052105310541055105610571058105910601061106210631064106510661067106810691070107110721073107410751076107710781079108010811082108310841085108610871088108910901091109210931094109510961097109810991100110111021103110411051106110711081109111011111112111311141115111611171118111911201121112211231124112511261127112811291130113111321133113411351136113711381139114011411142114311441145114611471148114911501151115211531154115511561157115811591160116111621163116411651166116711681169117011711172117311741175117611771178117911801181118211831184118511861187118811891190119111921193119411951196119711981199120012011202120312041205120612071208120912101211121212131214121512161217121812191220122112221223122412251226122712281229123012311232123312341235123612371238123912401241124212431244124512461247124812491250125112521253125412551256125712581259126012611262126312641265126612671268126912701271127212731274127512761277127812791280128112821283128412851286128712881289129012911292129312941295129612971298129913001

「恐るべき群団だ！」

「ドレッドホートがもう来たっ！」

「伝承では、来るのはもつと後なのに！」

黒い袴袴の群衆は初々と如鑿の勢動を起して、ウラツチニソドの中に入りこみ、踏みつふし、瓦礫へと委えながら、教会へと突き進んでくる。

ドレッドホードの破壊の奇烈さを見るだけで、ウォッチランドの近代兵器を持たない人々がかなう相手ではないとわかる。人間は簡単に叩きつぶされ、引き裂かれ、殺されてしまったらう。

市民たちが恐怖に絶叫して、逆に恐怖に声を守って、静子の背後へまわり、そのままアंकル・ウオッチの教会の中へ駆けこんでいく。民衆より大きいといえ、木造の教会が黒い怪物の群れに対する防壁になるとは思えない。

何人かの男たちが教会の中に入らずに、入口の前で自分たちこそが家族の防壁になろうと立ち止まった。

男たちの決死の壁の前で、静子はその境から動かずにいた。今の自分に闘う力はない。自分を勇者と信じている。非常時のために護身術を習っているが、この状況でなんの役にも立たない。いだろう。

それでもスーパーヒーローの自覚がある。自分が伝説の勇者ではなくても、人々を護らなくてははいけない

（この状況では、人カ一カ所に固まってしまうと、被害が大きくなる。われわれは、はらにはらに進いたほ、一カ被害を少なくできる。耐性力が高い、あ

思案している間にも、家々を破壊して黒い怪物たちが迫ってくる。静子は決意して市民たちに声をかけようとしたとき、教会の三角形の屋根の一部がスライドした。開いた空間からアングル・ウォッチの銅像が姿を現した。

高き三メートルの聖者の銅像が足下の直方体の台座ごと、教会の屋根の上に浮かんでいる。ウォッチランドの住人でなくとも、奇蹟が起きたと信じるような光景だ。

しかし酵母のナノマシン脳は、台座の中で今まで眠っていた機械が起動していると検知した

（ウォッチランドに高度な技術がある！魔法ではなく、失われたテクノロジーなの!?!）

アンクル・ウォッチ像は空中を素早く移動して、静子の前の地面に着地した。間を置かず銅像がバラバラと分解しはじめる

皮を剥ぐように崩れ落ちた聖者の内側から、別の立像が出現した。

甲問た。

30

三丁口ッハの中世に流行した馬上槍試合の競技者が装着するよきな。金屬の兜と鎧で全身を覆ふタイプの甲冑

の、装着者の顔を隠す面頬も女らしいほっそりした仮面だ。

静子のローズデバイスアーマーに雲間気は近いが、シン

なイメージの装飾が施されている。色も煙ひやかな漆紅と青と白に彩られて、神々しい輝きをまとう。

さらに背中、純白のマントが伸びて、大きくひろがった。まさにいろいろな物語に出てくる聖なる勇者の姿だ。静子のすぐ後ろに踏みとどまっているユドルフ市長が、膝をついて感嘆の声をあげた。

「おおお、勇者の恩寵！」
先代の勇者様がお使いになつたという譜が、
アンクル・ウオッチ様の象の中に隠されておつたとは――

市民たちと同じように驚きの顔で見つめる静子の前で、台座が回転してブレイクダンスが背面を見せた。自動的に白いマント

すれて、甲冑の足下の衣層に落ちた。現れた甲冑の後姿は、背中の優美なラインも、むづちりと張った尻も、やはり女らしい造形を
見せつける。

ヘルメット、バックブリーザー、キョウアツアーム、つばさ

甲冑の後ろ側の兜の後頭部と首、背の装甲と尻当てが複雑に分割されて、蓋がほころぶように開いた。内側にはスペースがあ

り、表面は静子も知らない柔らかそうな材質になっている。

（伝説の鐘と言うけれど、明らかに機械だわ。それもかなりの高度なテクノロジーの産物。あたしが勇者に選ばれて、召喚されたの

初見の未知のアーマーをいきなり装着するなど、どう考えても危険すぎる。
は、ブレイブグレースというアーマーを装着するため!!)

（それでも、やるしかないわ！）
 どれほど危険なことでも、人の命を護るためなら、フレアも、スターサンダーも、オセロットも、た

静子は素早くワンピースと靴を脱ぎ捨て、黒いボディスーツ姿になると、台座に駆け上がった。足の下にマントの柔らかい布を感じ

 $\overline{H^0}$

（出現してすぐにはすすのなら どうしてマントを二けたいたのかしら？ そもそもマントは必要なもののなの？）

サンダークラブスのメンバーで唯一コスチュームにマントがあるフレアに聞きたくても聞けないという疑問を浮かべながら、甲斐

の開いた尻の部分に足をかけて、身体を中に滑りこませる。

両脚がブレイクレースの腿当ての空洞に入り、両腕を串刺しの腕の中に押しこむ。顔を兜の面頬の裏側に当てると、自動的に背面の

装甲がパタパタと閉じて、シクソーバズルさながらにびっちりとは組み合わさる

全身に運動のエネルギーを、あつたえなすに脂肪の身体にフィットする。静子自身が作ったローストバイスアーマーはナノマシンの脳にリンクして、アーマーを自分の肉体として認識できる。装甲は自分の

皮膚であり、各種センサーは自分の感覚器になり、動力機構は自分の筋肉と化す。アーマーから直接脳に送りこまれてくる人間の五感

以外の情報を知ることができる。ナノマシンの脳のおかげだった。

ブレイブグレースはその機能はない。VRのように目の前に映像が現れるだけだ。

その映像はブレイブグレースに関する情報が構成図と日本語の文字で現れ、耳にも日本語の音声の解説が聞こえた。

(あたしの動きと周囲の状況を判断して、ブレイブグレースが最適な活動をするのね。特別な指示は声ではいいい)

眼前の映像から文字が消えて、広場に面した家々を突き崩して出てくる黒いドラゴンの頭部が映った。

闇を凝り固めたような光沢のない黒い頭。開いた口の中も黒く、黒い牙の列が並び、黒い舌が蠢いている。唯一、眼球だけが黄色く

発光して、得体の知れない悪意を感じさせた。

「皆さん、下がってください！」

甲冑の中で叫んだ静子の声が、ブレイブグレースから大きく響いた。台座をマントを纏り、ドラゴンへ向かって跳躍する。高々と空

中を翔けながら手足を動かすと、ほとんど抵抗は感じない。動きやすい最高のスポーツウェアを着ているような感覚だ。

「武器を出し！」

つぶやくと、広場の石畳の一部がスライドした。開いた穴から剣が矢のように飛び出し、空中で軌道を変えて、柄が甲冑の右の

脇手に収まる。

ブレイブグレースが持つにふさわしい華麗な装飾が施された柄から伸びる剣身は、三メートルもありある。通常の人間以上の身体能

力を持つオブジェクトでもなければ、思惑なく大男でも持ち上げることは難しい重量の大利だ。

しかし静子は軽い格を握っている感触しかなかった。長大な剣の重量は、甲冑が巧みに吸収して、中の装飾者の負担にならない機構

になっている。ロースパイスマーにも同じシステムがあった。

自身が作った巨鎧を四本の太い脚で踏みしめて、鎧を付けた黒い胴体が広場に侵入した。

「このっ！」

静子は剣道や剣術の経験がない。ロースパイスマーはアーマーに内蔵した多数の武器を駆使して闘う。習っている護身術も、剣を使う

ことはない。ブレイブグレースは大量量の剣を踵上に振り上げ、真正面からドラゴンへ向けて叩きつけた。重さと速力は甲冑が引き

受ける。狙いもブレイブグレースが補正してくれた。

剣身がドラゴンの盾面に衝突し、ぶち割った。頭部が二つに割れ、長い首が縦に裂け、胴体の前半分が切り開かれた。

ドラゴンの動きが止まり、その場で崩れた。

裂けた胴体から血液は流れなかった。内臓もあふれ出ない。断面から見えるのは複雑に絡まり合う機械。

「ロボット!!」

隣の家を突き破って、巨大クワカラムが飛び出した。チェンソーのように振動する二本の大剣が、ブレイブグレースを挟むこと

で止まる。

「飛んで！」

とっさに静子が叫ぶと、甲冑の足の下からジェットを噴射した。大剣が閉じる寸前にブレイブグレースが飛翔する。そのまま身体を

ひねり、回転して、剣をクワカラムの頭部と胴部の境の目に叩きつける。

金属音を響かせて、頭部が切断された。広場に転がる虫の頭から金属の部品がばらまかれ、石畳がカンカンと硬い音を鳴らす。

「ドレッドホードはロボットなの!!」

ウォッチランドに侵入してきた怪物たちがロボットならば、突然電波を感じた理由もわかる。ドレッドホードたちが互いに通信し合

っているのだ。

「はっ!!」

警報が鳴り、目の前の映像に背後の敵が映った。空から屋根へ向かって、黒い怪鳥が急降下してくる。

「だめっ!!」

ブレイブグレースが大剣を投擲する。ミサイルのごとく飛んだ剣先が、巨鳥の胸を深くと貫く。胸から青い火花を噴き上げ、軌道を

変えて石畳に頭から激突した。

「別の武器!!」

静子が叫ぶ。石畳の別の一面から、槍が飛び出した。ブレイブグレースが走りながら槍をつかみ、空気を裂いて足の生えた怪鳥へ突

撃する。

怪鳥の二つの眼球の間に、穂先が突き刺さった。

「次の武器!!」

倒れ伏した怪鳥の腹を突き破って、鉄の塊じみた斧が現れる。長剣以上に人間に持てそうにない巨大な斧を、ブレイブグレースが

軽々と構えた。左右から響いがかつてくる黒い狼二匹の間の間を高速で駆けて、狼の胴体を叩きつづし、大蛇の頭をすべて破壊

する。

頭上から落ちてきた大カエルをかわしたが、斧をきこまれた。即座に武器を呼ぶと、今度はハンマーが飛んでくる。柄を握った勢

いのまま、カエルの脳天にハンマーの先端を振り下ろした。カエルの頭が深く窪み、左右の眼孔から大きな眼球が飛び出して、コールド

を引いて動かっていた。

静子は新たに現れた弓矢に手をすると、鋼鉄の結のような矢を次々と上へ放ち、空を飛ぶ怪物たちを続々と射撃した。

矢をすべて撃ちつづくと、弓を背後に追った黒いカキリの胴体の側面に打ちつける。カキリの胴体がくの字に折れ曲がり、その

場で鎌と脚を折り狂わせながら横倒しになった。

そして、

そして……

新たな黒い怪物の襲撃が途切れて、何かも過ぎた。見渡せば、広場には静子が破壊したドレッドホードの残骸が大量に散乱してい

る。怪物がまた出現すれば甲冑が自動で知らせてくれるので、静子はひとまず倒した怪物を調べた。

生物ではなく、作り物なのは間違いない。見たところ静子の理解の外にある魔法の産物ではなく、科学技術が造り出した機械だ。

ブレイブグレースといい、ドレッドホードといい、ウォッチランドの技術レベルをはるかに超えているわ。この世界では過去に高度な

な科学技術があったけれど、文明が崩壊して、忘れ去られてしまったのかしら。だとするとブレイブグレースとドレッドホードは失わ

れた過去の文明の遺産。あたしを銀座からこの世界に召喚したのも、魔法ではなく、次元を超えるほどの高度な科学技術がもしれない

わ……

静子がフレイグレースを装飾したまま残骸の調査をつけていると、周囲に人々が集まってきた。教会に隠れていた子供たちが甲冑に手を触れて、口々に感謝の言葉を言う。

「ありがと、シズコ様」

「ありがとうございます。シズコ様」

「シズコ様は命の恩人です」

「感謝します、シズコ様」

子供たちだけでなく、大人たちも、感謝の声を大きくしていき、やがて勇者を称える万歳の合唱へと昇華した。

「シズコ様、どうぞ市民たちにお顔を見せてやってください」

「わかりました」

「外へ出るわ」

フレイグレースの兜の後部と背、中が開いた。胴体と手足を包む柔軟な材質が露き、静子の身体を外へ押し出していく。甲冑の背から後ろ向きに出る途中で、静子は思った。

「なんだか、幼虫から羽化するセミになった気がする」

跳び下りて壁に立つと、とりかこむ大人たちがいつせいにさますき。子供たちは歓声をあげて跳びはねた。

「ああ、助かしい！」

静子の頬が、怪物ロボットの群れと闘っているときよりも紅潮する。ローズパイプとして人々から歓声を浴びるときには、アーマーに隠れて素顔は見せていない。静子のイメージでは、賞賛されるのは自分ではない別人だ。

「あの、皆さん、落ち着いてください。今後のことを話し合います」

静子の言葉はますます大きくなる歓声にかき消された。

第一章 恐怖に犯される

ウォッチランドにある最も大きな酒場で、祝宴が開かれた。市民が誰一人として傷つくことなく、ドレッドホードを逐ほした記念のパーティーだ。

静子はもしものことを考えて、酒場までプレイグレースを移動させることにした。

ロースデイスアーミーなら静子が装備しなくても、アーミーだけで目的地に歩かせるくらいは簡単にできる。

面倒なことプレイグレースは中に入がいないと動かないとわかった。おかげでもう一度プレイグレースに入り、市民たちにかこまれて移動してから、酒場の中でまた脱ぐことになった。静子はすぐに装備できるものに、自分の格好の後に甲冑を立てた。

さらに自分でなくてもプレイグレースを動かせるのではないかと考えて、何人もの男に試してみようとした。しかし静子以外の人が装備しようとしても、甲冑の背面は閉じしまま、受け入れるのは静子だけだ。

そこについているうちに祝宴の用意が整い、静子の前になみなと酒がつけられた木製のジョッキがいくつも置かれる。

「すみません、せっかくの厚意ですが、お酒は飲めないんです」

と、断つために、ブドウのジュースで乾杯の言葉を取ることになった。店中の視線が集中するなかで、ナノマシンの脳をフル回転させて、らしい言葉を探す。

「えーと、麗さんのパースティーパーティーのときは、麗さんが自分の故郷の盛衰の姿を延々歌ってた。ジャスティスサーカスのパーティーに招待されたときは、キャプテン・スカイさんがとていことを言ってたわ」

「あの、あたしも麗さんのお役に立つことができて、とてもうれしく思います。皆さんの無事を祝って乾杯です」

あたりさりのないこじけ言えなかったが、ジョッキやマカブをいっせいに打ち鳴らし合う音色がほやかに反響した。

その後、人々がわれ先に祝いの言葉を叫び、感謝の言葉を捧げた。キターに似た楽器がジャンジャンととき鳴らされ、小さい太鼓がいくつも打ち鳴らされて、勇者を称える歌が何度もくりかえされる。

大騒ぎのなかで、静子は下ルブ市街やまわりの老人たちからウォッチランドの歴史と伝承を聞き出した。

「そうなの？」

「よく聞いてくださいました……」

「わが家の祖は、誰あろう……」

と、早くも酔いがまわっている老人たちのまわりくとい話をまどると、ウォッチランドがあるこの世界、住民が特別な固有言語ではなくた『この大地』と呼ぶ世界では、大昔に大きな戦争があった。大國同士が魔物の軍団を戦い合わせた結果、古代の国々は滅びた。

老人たちが『破滅の大戦』と呼ぶ凄惨な時代のなかで、大勢の難民が難民アンクル・ウォッチに導かれて、ウォッチランドにやってきた。アンクル・ウォッチは人々を導くために、ウォッチランドの周囲に巨大な城壁を築いた。

それ以来、難民の子孫がウォッチランドに住んでいる。普段は城壁にある城門を開放して、外の人々と交易をしている。

そしてアンクル・ウォッチは姿を見せないが、今もウォッチランドを守っているという。

ドレッドホードは、『破滅の大戦』に兵器として使われた多数の魔物の生き残りだという。今も群れをなして世界を徘徊し、各地で人々を襲い、大きな被害を出している。

ウォッチランドではドレッドホードが襲来する前に、アンクル・ウォッチが別の世界から勇者を召喚してくる。

静子は何百回かの勇者だといっ。

やはりこの世界には過去に高い科学技術を持する文明があり、戦争で崩壊したのね。ドレッドホードは野生化したロボット兵器。アンクル・ウォッチは人々を導く正統の科学者と推測できるわ。きっとアンクル・ウォッチが導いたAが、今もウォッチランドを管理しているのね。そこまでは理解できるけど、でも、別の世界にいるアーミーの使用に慣れた人間を見つけたして、次元を超えて召喚する技術は、あたしには想像もできない。なにをどうすれば、そんなことが可能なの？」

静子の推測を外にして、宴会はついに。

そうして夕焼けも過ぎ、日が暮れ、ウォッチランドの上空に星々が輝いたころに、静子は疲労を理由にして、酒場の二階にある宿屋の一番良い部屋に入った。またプレイグレースを離れ、ベッドサイドまで進んでから、ワンピースを脱ぎ、黒いボディースーツだけにうてベッドに潜りこむ。

あらかじめ勇者のためにあつらえたというベッドは、心地よく眠ってちかちかという心づくしを感じられて、気分よく就寝できた。

何時間、眠ったらうか。

爆音が轟き、窓からなれこむ赤い光が寝室を染める。同時に新たなドレッドホードの通信を感じ取った。

ナノマシン脳が瞬時に覚醒して、静子はプレイグレースの背に飛びこみ、窓から飛び出した。

「こんな」

酒場の近くの町の一面が燃えていた。十軒あまりの家が轟々とうなる紅蓮の炎に包まれている。

炎の前に、黒いシルエットがそびえていた。

黒い馬にまたがった黒い甲冑。その頭部は黒い機體。

ドレッドホードではじめて目にする人間型だ。黒い動物を巨大なデフォルメしたロボットたちとは違い、馬も、馬上の人間も、本物と同じサイズ。

「おまえが召喚された勇者だな」

黒い機體の口がカタカタと動き、おどろおどろしい声が出た。ドレッドホードが声を出すのとは異なっていた。

「記録を」

静子が叫ぶ。地面から二本の刀が飛び出し、プレイグレースの左右の脇、手に収まった。

機體が甲冑の右腕を握った。黒馬が口を開き、黒い喉の奥から紅蓮の炎が噴出して、プレイグレースの全身を包み、さらに背後の民家を燃え上がらせる。

全身を火炎にさらされても、甲冑の中の静子は温度の上昇を感じなかった。耐火機體は確認してある。黒馬が吐きつける炎をものとせず、機體騎士へと駆けた。

だが、火炎の向こうに見えたものが、静子の足を止めてしまう。

髑髏の顔に、ドレッドホードではじめての黒以外の色があつた。髑髏の眉間から上へ向かつて深紅の太い線が伸びて、頭頂部近くでもう一本の赤い横線と交わり、Tの文字を形作っている。

「黒い髑髏に血の色のT！ まさか！」

静子の脳内データベースにある人物の姿が暴跳に浮かぶ。甲冑ではなく黒いライダースーツを着て、馬ではなく怪物じみたデザインのバイクや自動車に乗っていた。対峙している誰かだけが、過去の記録に残る黒い髑髏に赤いTを記したデザインそのまゝ。

その怪人物に、静子は会つたことはない。静子が生まれる前に、すでに死んだとされていた。映像記録や文章だけで知っている名前を呼んだ。

「恐怖御なの!?」

馬上からレイブグレイスを跳脱する髑髏が、馬剣を刺き出しにした口を動かした。鐘と同じように輝く金属製に見える髑髏だが、柔軟に動いて、場々しい笑みの表情を作る。

「ああ、俺はテラーロードだ。俺を知っているなら、おまえも地球から来たな。レイブグレイスを装着して、なんの得にもならない人助けをしているところを見ると、地球のスーパーヒーローに違いない。今も俺の名前がスーパーヒーローに伝わつてるとはうれしいぜ」

「テラーロードが別の世界で生きていたなんて……」

テラーロードの名が、いやおうなく数々の理不尽で惨憺な事件の記録を浮かび上がらせる。脳のデータベースの奥に沈めている吐き気を催す残虐行為の数々が、静子の心をかき乱していく。一般には公開されていないが、スーパーヒーローをしているおかげで見えてしまった写真や映像が次々あふれる。

そしてテラーロードの名は、もうひとりの偉大な伝説のデータを引っぱり上げた。

スーパーオフビートがデビューした後に、アメリカに数々のスーパーヒーローが現れた。最初期のヒーローたちのなかでもスーパーオフビートに次ぐ伝説を作つたのが恐怖の騎士だった。

テラーナイトは今もついに包まれたスーパーヒーロー。正体不明なのはまだしも、本当にオフビートだったのかすらも意見が分かれていて、明確な超能力を見せたことはないが、臨機応変な知恵と抜群の身体能力は人間を超れていた。一説には、スポーツや格闘技のチャレピオンが最高に集中した状態を長時間も持続できたという。

スーパーオフビートが罪なき人々の希望と呼ばれたのに対して、テラーナイトは罪人への戒めと恐れられた。テラーナイトはけつして人を殺すことはなかったが、犯罪者たちの心に深いトラウマを残した。人を人とも思わぬキヤングのボスや、良心を捨て合わせていない詐欺師や殺し屋たちが、テラーナイトに出会つた後は幼児のように怯えた。それこそがテラーナイトの超能力だともいわれてきた。

メンタルコントロール

テラーナイトは数々の伝説と噂を作つた後に、闇へと消えた。重要な兵士と自称する狂った愛国心とマインドコントロール能力を持つ二兵士が、人知れずアメリカ軍の基地を支配下に置いたときに、テラーナイトは一万の兵隊と闘つた。操られた兵士をひとりも殺すことなく、基地の奥に隠れていたメイシシルジャーとともに姿を消した。

テラーナイトは自分がマインドコントロールされるのを防ぐために相手殺すだけでなく、不殺の誓いを破つたためにヒーローを引退したともいわれる。あるいはテラーナイトは本当に人間ではなく、メイシシルジャーを連れて魔界に帰つたと噂する者もいる。とにかくテラーナイトの伝説は、世界中にフォロワーを生んだ。

日本でもテラーロードと名乗る人物が名乗りをあげた。

自分が製造したマシンを操り、犯罪者を処刑するヒーロードと、自ら世間を喧伝した。当初は犯罪者を殺すことを賞賛する人々も一部にはいた。しかしテラーロードはすぐにヒーロードではなく、自分が死に入らない人間を修殺する殺人鬼だと判明した。

日本最初のヒーローチームであるジャスティスサーカスに追われたテラーロードは、自分のアジトで自爆した。破壊されたアジト内からバラバラの焼死体が発見され、テラーロードは死んだと確認された。

本当にテラーロードとしたら、見つけた死体は逃亡用に準備しておいた偽物……」

静子は甲冑にたずねた。

「テラーロードが人間だと確認できる？」

目の前にレイブグレイスのセンサーが検知したデータが示される。様々な証拠が、黒い髑髏と鐘の中に、何者であるにせよ、生きた人間がいると明示した。

レイブグレイスが両手の剣を握るえば、確実には人間の人間を殺してしまう。相手は何人殺したか知れない人の皮を被つたモンスターであっても、静子には殺せない。

静子は剣を一本とも捨て、地面を踏つて、砲弾のように前進した。

（この手で、鐘から中の人間を引き出すしかないわ！）

爆めく鋼の面胸が、黒い鐘に届こうとしたとき、レイブグレイスが横直した。静子の動きをトレースして走っていた甲冑の手足が、いきなり動かなくなる。

「あつー」

静子の驚愕の声が、甲冑の中に響く。装いのついた金属の身体は止まることができずに、前のめりに転倒して、水切りの小石のように地面の土を何層もバウンドしていく。テラーロードが騎乗する黒馬の蹄の跡をかすめて、何メートルも転がり、背中を建物の壁に激突させて、ようやく停止した。

普通なら重傷を負うような大転倒だが、甲冑の内側の全身を包む柔軟な緩衝材のおかげで、衝撃は軽減されて、痛みを感じることはない。静子は素早く立ち上がりうろたえと手足に力をこめたが、なんの反応もない。ついさっきまで思ひのままだに動かせた甲冑が、今では全身を拘束する道具と化していた。

それでいて外の映像も音声も届く。機械の黒馬が四本の脚を動かし、その場で反転して、黒い馬面をレイブグレイスへと向ける。ドレッドホードの黒い髑髏が口を開ける様子が見え、刺き出しの歯列の奥から出る笑い声が聞こえる。黒馬も黒い大きな歯を刺き出し、二つの鼻の穴から炎を轟々と噴き上げた。

走るボースで固められて壊倒しになつた静子は、思わず甲冑の外にまで聞こえる声を出した。

「な、なにが起きたの!?」

馬上のテラーロードが満足気に舌出した。

「俺のオペートの力だ。俺は機械の脳髓を操れる魔法使いさ。この力があるおかげで、俺もウォッチランドとは別の場所にある古代文明の遺産に、勇者として召喚された。見ての通り、俺はドレッドホードの野蠻ロボットたちの頭脳を支配して、勇者ではなく魔王になつてやつたぜ」

テラーロードの資料には、自作の乗り物や機械で人を狩り、殺した、としかなかった。今、静子は、テラーロードはもつと恐ろしい存在だと理解した。コンピュータのプログラムを自由に操るオペートだ。

テラーロードがいた時代には、進んだコンピュータもインターネットもなかった。もし現代の地球にいたら、神のごとく世界を支配していたかもしれない。

「俺は以前にもウォッチランドに来た。この仮面と鎧の姿ではなく、ただの行商人として街に入り、勇者を召喚するシステムと、プレイブグレースの存在を知った。俺がプレイブグレースを支配できることもわかった。それから楽しみに待ってたぞ。異世界から来る勇者と闘う日が来るのを。もとの世界では俺はヒーローどもに敗北したが、この世界では俺がヒーローに勝つ！俺がヒーローをなかり殺す！」

ウォッチランド中に轟けとばかりに宣告した後に、テラーロードが声のトーンを変化させた。声に下卑た笑いがにじむ。静子が聞いた。幾された過去の肉声と同じだ。

「しかし、勇者が女なら話は別だ。女は殺すだけでなく、他の愉しみもたっぷりあるからな。さあ、愉しめるかどうか、顔を見せて」

黒い鎧の右手が前に突き出され、開いた指をキュッと握った。

「あつー」

甲冑の手足が勝手に動き、プレイブグレースがなめらかな動作で立ち上がった。倒れる前までは静子の動きを甲冑がトレースしていたが、今はプレイブグレースの動きに静子が強制されている。

「外へ出して」

静子が命じても、背面は開かない。そのままずたずたと歩き、馬上のテラーロードの顔で立ち止まった。

プレイブグレースの面頬部分が上にスライドして、兜の中に収納された。全身を包む暖ひやかな甲冑から、静子の顔だけが外気に触れ、黒い鎧の眼球の無い眼孔にさらされる。鎧のマスクの中の目が、じつくと勇者の姿を観察して確認みしているのを、静子ははつきりと感ぜさせられた。

闘っている最中に犯罪者に素顔を見られることは、静子は派手でない。こういうときにスパーヒーローはどんな表情をすればいいのか、正直なところ困惑してしまつ、どうにか怒りをこめた顔を作つて、鎧をならみ返した。

「寂しいな、プレイブグレースの中の勇者は子供か」

「……」

子供が美人だ。気に入る。充分に愉しめる。こんなかわいい顔だとスパーヒーローとして迫力がないな。ヒーローのときは、コスチュームのマスクで顔を全部隠しているのか。おまえの正名はなんだ。ヒーローネームと本名を教えろ」

静子は顔を聞かして答えなかった。

「異世界の人たちならまだしも、同じ世界の犯罪者に名前を教えるわけにはいかない」

「俺には教えられるのか、まあ、当然だな」

テラーロードの右手の指が、プレイブグレースの首をつかんだ。そのまま横立ちのプレイブグレースが持ち上げられる。

「……あつー」

普通なら首が折まつて、息がつまることだが、甲冑が護つてくれる。静子は痛みも感ぜず、呼吸も変化はないが、なんの抵抗もできずに最低の人殺しに人形のように吊るされる気分は最悪だ。怒鳴るのではなく、静子の声は冷やかになった。

「起してくださーい」

静子の言葉を無視して、テラーロードの鎧のマスクから出る声の音量が一気に大きくなり、人間の音量を超えてウォッチランド中に轟く大音量化した。プレイブグレースで耳を護られていなければ、静子の聴覚が危殆に陥ったかもしれない。

「ウォッチランドの住民はよく聞けっ！隠れている家から顔を出して、俺を見る！誰も顔を出さなかったら、家に火をつけてやるぞー」

仲間が書き送り、やがて家々の窓や路地の角から何人も顔が覗いた。

赤い丁の紋章を額に記した黒い鎧が、市民たちの顔をゆくりと見まわす。

「俺はテラーロード！ドレッドホードの支配者だ！勇者が敗北したんだから、本来ならば伝承の通り、おまえたちをドレッドホードに皆殺しにせるところだ。だが俺は勇者を捕らえたことで通じている。おまえたちを殺すのはやめておいてやる。ただしウォッチランドの城壁の門は閉じたま。ウォッチランドの外へ逃げよう門に近づいた奴は、門前に置いた罠の爪で引き裂き、牙で噛み砕き、炎で焦やしくしてやる。そしてー」

テラーロードが腕を振りまわし、プレイブグレースを糸の切れたマリオンネットのように揺らした。町のそこかしこから叫び声があがらる。

「勇者静子を助けようとした奴も、バラバラに切り刻んで、蛆虫の餌にしてやるぞ！おまえたちはただ家に閉じこもつて震えている」

鎧が再び静子の顔を覗きこんだ。

「勇者を俺の城に招待してやるぞ、見る！」

テラーロードの右手が、静子の顔を夜空へ向けた。黒い空にちりばめられた星々の一部が消えた。と、思つと星を隠す影が落下してく。

次の瞬間、ウォッチランドの中心に建つアンクル・ウォッチの教会が、凄まじい破壊音を轟かせて吹き飛ばされた。屋根も壁も床も粉砕され、木片となつて周囲に飛び散る。

強烈なシエッタを噴射して制動をかけて、教会があった場所に着地したものは、黒々とした別の建物。金属製の城というべきだろうか。大ききは日本の裕福な邸宅ウサのサイズだが、外見はトゲトゲしく攻撃的で、城そのものが迷宮道という雰囲気を感じた。

さらに街のあちこちから新たな黒い怪物ロボットがいくつも姿を現し、番犬のごとく城の周囲にすらりと近づく。それぞれが鋭い牙を剥き、長い鉄爪で空を裂き、角を振り立てて威嚇する。

巨大な機械のライオン、サソリ、双頭の鷹、ムカデ、蟹、フクロウ、トンボなどの異形の群れの間を、馬に乗ったテラーロードが悠然と進んでいく。静子は首をつかまれたブレイグレースの中で、スルスルと引きずられた。

城の扉が自動で開き、二つと二頭あるいは二機が入城した。静子の目に、カランとした扉内が映る。凝った外見に比べて、天井や壁の照明に浮かぶ内側には装飾がなく、まるっきりただの箱だった。

奥の広い部屋に入ると、静子は無造作に床に投げ捨てられた。動かせない甲冑に拘束された視野に入るものは、黒いロングソファとテーブルだけ。とても人が快適に暮らせる住居には見えない。

静子を連れテラーロードはソファに座らず、部屋の中央に仁立立ちになった。

「勇者静子、俺の本当の姿を見せてやろう」

すると黒い鎧がひとりでにパーツに分割されて、バラバラと床に落ちた。ガシャンガシヤと金属音を鳴らして散らばるパーツの中央に、一糸まとわぬ男の素裸身が現れる。

残ったのは首から上を隠す胸飾のマスクだけ。

テラーロードは冷戦時代に姿を消した。当時二十歳そこそこ。今はかなりの年齢になるはずだが、全身の隆々たる筋肉から力のみが感じられる。さらに顔には黒々とした胸毛が密生している。今では男の胸毛は人気がないが、テラーロードが暮れた時代には濃い胸毛は男の魅力のひとつだった。

たくましい筋肉の束と濃密な胸毛のせいで、テラーロードがただ立っているだけでも、静子は強烈な圧迫を感じてしまう。

きれいに割れた腹筋の下には、ペニスと睾丸が垂れ下がっていた。今は鎮まっているが、勃起すれば猛々しい猛毒の大蛇になるだろうと思わせるサイズ。

静子は男性器を目にするのは、今がはじめてではない。犯罪者には、女のスーパードロに自分の奥のシンボルを見せつけた者が多い。静子もその犠牲になつてきた。だから自分を閉じたり、逸らしたりすると、よけいに犯罪者を悦ばせると承知している。

強い意志を持ってテラーロードの裸身にらみつけた。

「うた、鍛えられているだろう。悪党は身体が資本だからな」

トスン、ト音を立ててロングソファに裸の尻を下ろした。両脚を広げて、股間を静子に見せつける。

「ああ、勇者静子、俺を愉しませろ」

静子は床に転がったまま、テラーロードを見上げて言い放った。

「お断りします」

自分ではできるかぎり声のトーンを低くして、陰しい語気で返したつもりだった。しかし黒い胸飾がニヤリと笑つてくる。

「愛らしい声だ。そんな声ではヒーローの恰好がつかないな。顔を隠すだけでなく、いつもは声も変えているんだろな」

「あなたを愉しませるつもりはありません」

「静子の気持ちなど、どうでもいい」

テラーロードの右手が、静子の顔を指さした。

ブレイグレースの密部分がいくつかのパーツに分割して、床に落ちた。今まで顔だけを出していた静子の首から上があらわになり、ショートヘアの頭や耳が外気に触れる。

「こんなことまでできるなんて！ あつー」

テラーロードが指を動かして手招きする。指からマリオネットの糸が伸びているかのようだ。ブレイグレースがひとりでに動き、しなやかに身体を起こした。

中にいる静子も立ち上がり、強いられた体順な足取りで一歩一歩、テラーロードの裸身へ向けて進んでいく。

ロングソファに座るテラーロードの両脇が広がった。左右の太腿の間にブレイグレースが入り、リラックスした男根と睾丸の前で止まった。

黒い胸飾が上を向き、虚ろな眼孔の奥の間が静子の顔を見つめる。

「まずは、俺にキスしろ」

静子は面立したまま、つい普通に返つた声で質問してしまつた。

「その胸飾にキスしたいのか？」

「俺の素顔にキスしたいのか？」

「懸命に声を低くして、静子は強く否定する。」

「どちらでもお断りです」

「スーパードロはマスクとコスチュームがあつてこそだ。俺は素顔を見せるつもりはない。さあ、俺にキスするんだ」

静子が拒否の言葉を口に出す前に、甲冑が動いた。面飾を曲げて、身体を前に傾ける。人間ならバランスを崩して倒れる姿勢をブレイグレースが保持して、静子の顔を黒い胸飾へと近づけた。

静子の眼前に迫る胸飾のマスクは、色こそ黒いが質感は本物の鋼鉄骨に見える精巧な造形だ。甲冑の動きは、確実に静子の顔を剥き出しの歯の列に押しつけようとしている。テラーロードの素顔の口とキスをするよりは、作り物のマスクのほうがましという気もした。

「でも、悪党のシンボルに口づけをするなんて、くやしい！ 償けない！」

顔を強く閉ざし、絶対にキスの形を作らないと決意する。

「その顔はいいぞ」

テラーロードの言葉とともに、ブレイグレースの動きが止まり、静子は身体を前に傾けたポーズで固定された。静子の吐息が胸飾にかかる位置で、剥き出しの胸飾が笑ふ。

「なにがあつても人殺しの思い通りにならないという顔つきは、俺の好物だ。ヒーローはそうでなくてはな。そんな静子に、俺は定誓のものをさせるわけだ」

テラーロードの背後、ロングソファの背もたれの蔭から、細い柱に支えられたモニターがせり上がってきた。現在の機長の液晶テレビではなく、昔のブラウン管テレビの画面に近い形のモニターは、一辺が二メートル前後はある。

「ああ、面白いわ」

画面に、ウオッチランドに並ぶ民衆の一軒が斜め前から映った。家の前には、虎を思わせるドレッドホードの黒い口ポットがじつと立っている。ただ立っているのではなく、物陰で獲物に飛びかかる機会をうかがっている野生の猛獣が、あるいは命令を待つ異犬のように、鋼の肉体に力を蓄積していた。

「やっちま」

テラーロードの楽しい指示と同時に、機械の虎の右前脚が猛突ならびで横に跳いだ。閉ざされた木製のドアと壁がやすやすと引き裂かれ、虎が家の中に踏みこみ、モニターから姿を消した。男女の恐怖の絶叫が何種類も響いて、すぐに虎が外へ出てくる。虎の口からは、金属の牙に衣服の背を穿たれた若い女がぶら下げられていた。女はすぐに気絶しており、力を失った両足がスルッスルと地面に引きずられていた。

「酷いー」

静子は反射的に助けに行こうとしたが、プレイグレースは動かない。

壊された壁から中年の男が飛び出して、勇敢にも両手で握る犯で虎の胴体を叩き、カンカンと音を鳴らした。虎は意に介さずに、口の獲物を、撮影しているカメラのほうへ突き出した。血の気をつたった女の頭がコロコロと振れている。

「あの人を解放しなさい」

「静子がキスを拒否すれば、虎があの子の背骨を噛み砕き、脳を叩きつぶす。それでも拒否するのなら、ウオッチランドの住人をひとりずつ殺す。じいじでも、おん坊でも、畢竟よく殺すぞ。俺がそいつを人殺しだといふことは知っているんだらう。さあ、静子がどするのかが、自分で選んでみるな」

「あたしは、テラーロードにキスします」

「人質がいるためらいがないな、さすがはスーパーヒーローだ。だが一人称を静子にする。そのほうが面白い」

（面白いなんて……）

かつてテラーロードが惨殺した犠牲者たちとのやりとりを想像してしまい、背筋が震える。弄ばれた犠牲者が感じた戦慄を思い、対面している加害者への怒りがさらに膨らみ、指を真と化した甲冑の中で身体がわなな、それでも……。

この世界には、チームメイトはいない。フレアも、スターサンダーも、オセロットもない。他のヒーローたちもない。あたしだけ人々を助けるしかない」

「静子は、テラーロードにキスをします」

「いい言葉だ。かわいいキス顔を見せて」

静子は恋人とキスをするときを思い出そうとした。

（あたしは、どんな顔をして、俺とキスしているのかしら……）

特殊な生い立ちの静子は、サンダークラブスに加わってから、チームメイトのフレアと日々向かい合っていた。フレアはじめて恋愛をした。静子以上に特殊な存在である俺もまた、静子をはじめての恋の相手だった。二人の間では、いつもキスは俺のほうからしてきて、静子は受けるほうだ。

（無意識に目を閉じていたから、俺がどんな表情でキスしてくるのかわからない……）

プレイグレースが動きを再開して、静子の顔が機體に接近する。愛らしい美貌と不気味な黒機體が衝突するかという距離で止まる。

しかたなく今までに見た少女漫画や恋愛映画を参考に、顔を少しずすはめて突き出し、黒い前部の列にそっと触れさせた。

「うっ……」

機體のつまきが濡れてしまう。酒の香気だけでは肌質はわからないが、硬質のゴムのような。作り物のマスクでも、怪物にキスをしているという嫌悪は変わらない。

「かわいいキスだ。美少女ヒーローらしくていいいぞ、かわいい音を立てて、ちゅとキスして」

「へ……」

「ちゅ……と顔を鳴らした。嫌だが、キスの音を奏でるしかない。

「ちゅッ、ちゅッちゅッ、ちゅッッ、

何度も何度も口づけをくりかえしていると、黒機體の口がはじめて開いた。どんな仕組みになっているのか、上下に離れた歯列の奥は真っ暗で、中にあるはずの舌は隠れている。

「次は本格派のディープキスだぞ」

暗黒の内側からピンクのものが現れ、先端が静子の唇に押しつけられた。

「じゅっ……」

静子は思わず叫び、火を出されたように逃れようとした。だが身体の動きは甲冑にさまたげられる。唯一首から上だけは自由に動かせるので、顔を左にそむけた。

「なにをしているんだ。まっすぐ俺の顔を見ろ、さもないと」

うつく言葉はわかっている。静子は意志の力をかりしほって、顔を正面へ戻した。すぐさま唇にピンクのものを押しつけられる。

唇に密着しているものは、舌。

生身の人間の舌が、開いた機體マスクの中から伸びられ、静子はきつく閉じた唇の裏面をヌメヌメと舐めまわされる。

「ディープキスだと言ったぞ。静子も舌を出せ」

「そんなこと……」

ためらう静子の前で、モニターの虎に壁えられている女が大きく振りまわされ、虎を叩いていた男が前足の下敷きになった。男が悔しさに泣きめき、手足を離れさせても、機械の虎の前足は握るきもしない。虎が力をかければ、男の胴体が簡単に押しつぶされて、圧死するのは目に見えている。

（舌を出すしかないわ）

静子が無言で顔を開く。またテラーロードの楽しい叱責をぶつけられた。

「返事をしろ」

「はい。静子は舌を出して、ディープキスをします」

舌を出して、自分から先端をテラーロードの舌に触れさせる。人体で最も敏感な感覚器である舌に、不快極まりない感触が浸みこんでくる。テラーロードは口内のケアをきちんとしているらしく、口臭はなく、舌も汚れていない。それでも気持ち悪くてしかたなかった。

「うん……」

唇とは当然のようにティープキスを何度もしている。愛する人と舌を重なる行為は、陶酔するほど心地よい。

（理想では似た感触のはずなのに、ちう吐きそう……）

舌を口外に出しているのに、明瞭な言葉をしゃべれるのは謎だ。

静子は頬を引きつらせて、相手の舌を舌の裏で挟む。犯罪者の肉厚な舌が口内に侵入すると、腐敗した汚物を押しこまれた気がする。今すぐ吐き出す衝動を懸命に押さえつけて、自分の舌を敵の舌に絡めて、チューチューと言を囁らして吸った。

嚙嚙の口内の壁から、微かな笑い溜しりの言葉が出て、静子の唇に浴びせられる。

「気持ちいいぞ。若い女の舌は最高だな。女のスーパーヒーローの舌はもっと最高だ」

「んっ……」

ブレイブレスが勝手に動いて、静子は姿勢を変えられた。膝を曲げて、尻を床につけさせられる。顔の位置が下がったために、口内からスルリとテラーロードの舌が抜けていく。

さらに甲斐の力で顔を上に向けられた。視野に黒い天井が映る。

「な、なに……」

ヌッ、と視野に黒い嚙嚙が入ってきて、静子の顔を真上から見下ろしている。

「俺の唾を飲め」

「な」

「口を開けるなぞ。後ろの二人の命が惜しければな」

嚙嚙の歯の奥にぼつかりと開いた黒い窟から、たたらと唾液が滴った。静子はブレイブレスに固められて、逃げることはできない。

「っ……」

口を開いたまま落ちてくる唾液を待つのは、凄まじい忍耐力が必要だった。ローズデバイスアーマーを装着して、落下してくる唾液を受け止めたことがあるが、そのときよりも何倍も勇気がいる。

狙いがわす唾液が静子の舌の表面に落ちた。そのままとろろと流れて、喉の中にそそぎこまれる。

「ぶっ……」

たまらずむせて、上を向いたまま飲まれた唾液を戻してしまっ。あふれた人殺しの唾液が自分の口のまわりを汚し、ブレイブレスの首や胸に垂れていく。

「せつかく俺の唾を飲ませてやっているのに、こぼすんじゃないぞ。もったいないだろうだ」

嚙嚙がにやついた声で怒鳴り、より多くの唾液を吐き出した。増量した濃液な粘液が、静子の口内に満たされる。

「くぶっ！ うんん……」

息がつまりそうになり、懸命に飲みそうとする。しかし飲みきれない。

「あぶっ……うっ……」

「プハッ！」

口と両方の鼻の穴から、同時に盛大にテラーロードの唾液を噴き出す。

男の喉で唾をビシビシに濡らした静子の美貌をながめて、嚙嚙が罵々と笑い声を放った。

「ははははは。いいぞ！ スーパーヒーローの勇者静子様が、かわいい顔を俺の唾まみれにしてやるぜ！」

静子は唾液でバックされた顔を動かすこともできずに、表情をこわはらせる。

「顔を拭いてほしいぞうだな。俺はそんな親切をしてやる人間じゃないぞ」

静子はなにとも言う気にならず、顔を硬く不快感に耐えつけた。

「挨拶のキスを終わったら、本格的なお楽しみをするぞ。俺の身体を試めろ。舌で素手するんだ」

テラーロードがあらためてロングソファの中心に、どっかりと踵の尻を座らせた。後を追ってブレイブレスが動く、静子も再び中腰で身体を前に傾けた姿勢にされる。

今度はテラーロードの嚙嚙の前ではなく、降々と両腕が盛り上がった左腕に、顔が接する寸前で止まった。眼前に迫る顔えられた筋肉の生々しい圧力が、熱気ともなつて押し寄せてくる。なによりジャングルのごとく生える胸毛が、静子の鼻の先端に触れて嫌な

くすぐたさを感じさせた。

（自分で舐める場所も選べないの……）

選びたいわけでもないが、身体を操作されるのは結構いいかない。過去にも犯罪者に人質を取られて望まぬ行為を強制されたことはあるが、ここまで自由を奪われ、操り人形にされるのははじめてだ。

静子は舌を出して、テラーロードの左の乳房よりも上の肌に当たった。

「っ……」

敏感な舌に、胸の剛毛がジャリジャリと響く。

「んっ……んぶ……」

濡か水をするように舌を動かして、胸毛をかき分けて、皮膚と大動脈筋を舐める。筋肉繊維の凹凸が伝わってきて、汗が滲じった男の

肉体の味が神経を痺らした。ジャリジャリヒチャヒチュと舌が立てる音色が、静子自身の鼓動を叩いた。

（気持ち悪い！ 気持ち悪すぎるわ！ ああ……）

ブレイブレスが動きたした。顔が右へずらされ、ブラジリみた胸毛にこすられ、大動脈筋の表面をなぞられる。

「んっ……くっ……、あつ……んん……」

静子の意志を無視して、甲冑は上下左右に動きまわった。右胸から左胸へ戻り、また右胸へ。胸の中心から鳩尾を下降して、くつきりて浮かぶ腹、脇のひたひたを舐めさられていく。胸毛ほどではないが、腹毛もかなり毛深い。

（完全に道義あつかいされてる……）

その思いも、膝がテラーロードの股間に接近すると消し飛んでしまう。眼下に入る男根はいまだに勃起していない。静子を振り、機械あつかいしててもあそんでも、うたれる亀頭をソファの表面につけたままだ。

「このまま男のモノを口に咥えられろ……」

静子は当然の予想をして、あっさりとはずれた。

「ええっ」

身体が肉棒と亀頭を横目に見て、静子の顔はテラーロードの下腹部から右足の内腿へと滑った。膝を越えて、舌と唇と亀先をすね毛でこすられながら、足の甲へと進む。ついにはブレイクグレースが手足を屈して、伏せを命じられた犬のように床に這いつくばらされた。

「俺の足の指をしゃぶれ、フェラチオの要領で、一本一本丁寧にやるんだぞ、ちゃんと咥えろ」

「はい。静子は足の指をしゃぶります……」

「そうだな、小指からやれ」

テラーロードが右足を突き出し、中指の先を静子の鼻に押しつけた。力はこつていないので痛くはないが、鼻の跡を押し上げられた。

「はははは、美少女スーパヒーローが膝っ鼻になったぞ」

「こんなふざけた嘲笑に反応するのは無駄だわ」

静子は鼻を押し上げられながら舌を伸ばして、小指の裏側に這わせようとした。

「指の裏に這いついてる！これを舐めるなんて！でも足の汚れを指摘しても、やっぱりテラーロードを喜ばせるだけになってしまふ」

我慢して小指を舐める。舌の表面に埃がくっついて、口の中に入ってくるが、気にしてはいられない。

「むっんんん、んくっ……」

舌を小指と薬指の間に差し入れて、指の表側も舐めまわす。爪の本当の硬さをはじめて知った。

「ビチャ、ベチャ、ヌチュ……」

濡れた舌をたてて小指全体に唾液をまぶしていると、頭上から声が降ってくる。

「フェラチオの要領でしゃぶれと言っただろうが、指を口に入ろ」

先端から指の付け根まで、口の中に滑んだ。

「吸え、強く吸うんだ、返事しろ」

「ひゃい、しず子が強く吸ひます」

舌をすぼませて、思いつきり小指を吸引した。

「ジュルッ！ジュルッ！ジュル」

情けない音声が、自分の身体を伝導して聴覚に届く。

「いいぞ、初心な小娘みたいな顔のくせに、なかなかフェラチオが上手いな。やっぱり今でも女のヒーローは悪党のチンポをしゃぶらされてるのか？俺の時代のジャスティスサーカスのアイドル、白鳩（しら鳩）みたいな」

それはあなたが、んくっ……」

思わず小指を吐き出してあげた声が、口に突っこまれた親指にせ止められた。

ホワイトジョンは、ジャスティスサーカスの創設メンバーのひとりである女性スーパヒーローだった。当時のメンバーのなかでは最も若い彼女が、五人のオビート犯罪者グループを撃つべき大に凄絶に戦死された事件は、日本における女性ヒーローが悪人に犯された最初の事例とされている。テラーロードはそのフォーミュラファイブのひとりだった。

「サビシくて、間を抜かして親指をしゃぶらせてやる。しっかりと舐めて吸え」

テラーロードの膝を跨って言葉を聞いて、静子は口内を小さく親指に舌を絡めながら、胸の内をつなげた。

「あの事件のすぐ後に異世界に行ったあなたは知らないだろうけど、ホワイトジョンはヒーローをつけたわ。引退した今もジャスティスサーカスの予備メンバーの一員として、非常時には駆けつけて、人々を助けている。ホワイトジョンに比べたら、これくらいのこと、なんでもない」

決意を新たに、強く親指をすすす。

「ジュチャ、ズウル、ジュムワ……」

「よし」

突き入れられたときと同じに親指が舌裏に引かれた。硬い爪で舌の内側をひつかかれて、鋭い痛みが走る。

「くっっっ」

舌と外に出た親指の間に透明な唾液の糸が伸びて、ふっふっとなにに滴った。舌を濡らす自身の唾液をぬぐうこともできないまま、静子の口の中にテラーロードの左足の親指を突っこまれる。

「んくっっ」

また口内が親指でいっぱいになった。静子は意地になって舌でレルレルと舐めまわし、強くジュムジュムと吸いたててやる。

「んが……んくっ……むっんんん……」

「いいだろう。指はそこまできた。いい準備運動になっただろう。いよいよ俺の男のモノを味わわせてやるぞ」

ブレイクグレースが動き出した。屈した手足が伸びて、静子は應援から勝立右の姿勢にされて、顔の前にテラーロードの股間が位置した。視界を垂れ下がったペニスと亀頭が埋められている。

甲冑の両手は、テラーロードの左右に開いた太腿に置かれた。

そこから両手は掲げられたように動かなくなった。甲冑に囚われた静子には割がせない。

困惑する静子の顔を、テラーロードが見下ろす。

「最初は舌を舐める」

「手を動かさないでくださいね」

「だめだ、手を使わずにやれ」

「どうやるんですか」

「ヒーローなら自分で工夫しろ。ググググしてると、向こうのほうに先に工夫しちまうぞ」

「うっはははは！ 不埒だな！ スーパーヒーローのそういう情けない姿を見るのは気分がいいぞ」
 酔子は口の中に残る精液を唾といっしょに吐き出しながら、無言でテラーロードの笑い顔をにらみつけた。

テラーロードがロングソファから立ち上がった。股間では男根がたくましく屹立して、ついさつき大量の精液を吐き出したとは微塵も感じさせない。

「クレイジー・レス」を仲介して、
「アスリート」から来た。後へ向きに服が動き
ると、甲冑の胸部の装甲がはずれて、ガシヤンと硬い床に落下する。

ランロー・トからやや右側のある位置に立つ山

素肌に着ている黒いボディスーツの胸の部分が、はずれた胸部にくつついて破れて落ちた。防護防刃の特殊な繊維で編んだ布がきれいに切断されている。

静子はあらわにされた裸の胸をテラロードへ向けて、どうしようもなく立ちつくした。胸を隠したくても、プレイブグレースに阻
止されて、両腕を身体の外に垂らしたままだかたない。

まき出しになった髪は、垂髪な身体にささやかな二つのぶくびみがある。女子中学生でも小さなほくかもしれない。ただひかた丘の頂点には、ごく淡い桜色の乳輪がある。その中心にある乳首は、隣者者への嫌悪と怒りで硬く縮こまり、小さく硬い桜色の突起となっていた。

「おい、裸の胸を舐めまわすように凝視されて、羞恥に焼かれた色白の肌が朱に染まっていく。静子の肌の変化をながめて、テラーロードの顔體がにやついた」。

「コインも好きだぜ」

静子が知識として知っているが実際に聞いたことがない死語を言ってくるテラーロードに、羞恥心以上に怒りがふつふつと湧いてさらに肌を色づかせた。

下腹骨と股間。そして左右の大腿を含む股間が、かかと分岐してはすれた。その股々のポテ、フーツも染みかれて、股付前面のヘモカ
ら下と太腿がさらけ出される。胸の下の鳩尾や腹の上の部分の筋が、残されているので、ピギニの隠れた部位と露出した部位を逆にし
たようになった。

やはり脖子は手で秘部を隠すことも、身体をよじって視線から逸らすこともできず、真正面からテラーロードと対峙させられつづける。

現れたへそは、縦に細長くて愛らしい。へその下からなめらかにつくく下腹部に、恥骨がふくらとした曲面を描く。中心には縦の溝が走り、びったりと堅く閉じて、胴體が放つとす黒い視線を拒んでいる。

太腿は陣身術の訓練の成果もあって、静子の意識ではかつてより筋肉をつけている。だがテラーロードのマッチョな脚と比べればあまりに華奢だ。

「おっぱいも、アソコも、外から見るとすべてが子供だな。中はどうなっているんだ？」

「ああっ」

身体の横に垂れていた両腕が身体の前に出て、金属の短指と人差し指で縦の亀裂の左右をつまんだ。静子は手の動きを止めようとするが、抵抗は不可能だった。

こちゃんまりとしたアソコだ。肉壁もかわいしい、クリトリスも小粒だ。その小っちゃい穴に俺の立派な逸物が入るか。楽しみだ。

ロングソファの下から黒いものがぞうぞうと伸びて、静子の足下へ這ってきた。頭のない黒い蛇、いや、蛇のサイズの黒いミミズという表現に近い。静子は過去の経験から適切な言葉を口にする。

コブラのように先鋒をもたげた触手の先鋒から、透明な粘液が噴出して、押の胸と腹、そして指で広げたままの女花にぶつかられた。途端に胸と下半身の肌と粘膜がむすむすと落きはじめる。胸のさやかなつのふくらみがカッパと熱をはらみ、縮こまっている乳首がみるみる膨張して、体積を増やしていく。しこり勃ち、屹立しても、乳首は小粒だが、すくすくと可憐な疼きを発している。

薄い肉膜も充血してぶりぶりと厚くなり、クリトリスも乳首同様に小さいながらも、静子の限界まで勃起した。今にも陰核が内側から弾けそうに感じる。

乳首と肉芽よりもさらに強烈に、膣の内側が疼く！まるで入口から体内の奥に至るまで、壁粘膜の表面を極小の虫の大群がさわつてと這いまわっているようだ。もし肉脣をつまんだままの両手を自由に動かせるのなら、テラーロードに見られていても指を膣に突き入れて、一心に性感を掘り返しているだろう。それほど女体が刺激を求めて、せつなく咽び泣いている。

「卑怯よ！ くっ、いやらしい薬を使うなんて、うううんっ！」

「なになにを言うの、嫌味を使つのは相手の身のためだぞ。溜めてもいらないアノニを俺のたくましい男の武器で賣くのはかわいそうだから」

「モリチン」の方でさあかっているな。さあ、来い！ たぶりとよからせてやる！」

テラロートの呼び声に応じて、ブレイブグレースの脚が前へ進みだした。あいかわらず両手で自分の女性器を広げたまま歩く不様な動作で、陵辱者へ接近していく。脚を伝って滴った媚薬粘液が、ゆるゆるの足跡になって残る。

静子は、すぐにテラーロードが跳びかかってきて押し倒されると考えていた。しかしテラーロードはロングソファの前に直立したまま動こうとしない。

剥き出しの勃起乳首とウスウスするなだらかな胸が、密生する胸毛にこすられて、甘い刺激が発生した。

胸の内で叫んでも、静子は自分が限界だと感じる。媚薬に侵食されて、性感が何倍にも鋭敏になり、ゆつたりとピストンされている

「ああ、あと一度、強い刺激を与えられたら」
静子の危情を察み取ったように、テラーロードが二度目の腰の安全上げを喚びさせた。下降する静子の中に、男根が爆発的に筆上がある。傍若無人な舌にふさがれた口から、くくもった叫びがあらわれる。
「んこおおおおおっっ」
「スポッ！」と勢いをつけて舌が引き抜かれる。イクッ!! と静子は声を出しそうになり、必死に歯を閉じて歯を噛みしめた。舌の端から言葉にならないうめきがこぼれる。
「むんんんんんんん」

恋人の爆との愛の営みでは、恥ずかしいながらも絶頂の言葉を互いに伝え合う。恥ずかしいけれどどうでもいい言葉。しかし悪辣な悪魔相手には絶対に聞かせたくない。
こわばる静子の顔を見つめて、テラーロードが脅迫してくる。
「いったな」

「静子は言葉を責め」

「いいさ、次はきちんとイクと言って、俺に教える。さあ、いつけるぞー」
「あひっ!」

また静子の身体が尻を振りながら、ズルズルと持ち上がる。果てたばかりで、今も絶頂の余韻に揺蕩う身体が、新たな官能の大潮に呑みこまれた。
「くっおおおっっっっ! ダメッ! すぐにイク」

思わず喉を閉めて、恥辱の言葉を封じた。もしオッチャンドの人々を殺すと脅されたなら、テラーロードが望むこんな恥ずかしい言葉でも吐く覚悟はあるが、これは脅迫されていない。
だが瞬間の言葉のかわりに、テラーロードの右手がブレイクレースの尻を叩いた。
「ハキッ!」という金属の打撃音が響くとともに、静子の身体が振動する。

「ひいあああー! 嘘おおおー」
半日前にドレッドホードの怪物ロボット軍団と戦ったときには、ブレイクレースの苦痛への衝撃をシステムが吸収緩和して、身体に響かせることはなかった。ただ手で叩いただけこれほどの影響を感じるのには、やはりテラーロードのオーバー能力だろうか。

打たれた尻から全身へ伝播する波動が、静子の性感を華々しく弾けさせる。
「噫っっっっ! イクッ!!」
大きく開いた口から、なかなかに無差別に悪魔の言葉がほとばしってしまった。

「イクちゃっっっ!! あっおおおっっっ!」
「シヤア!

愛液がしぶき、テラーロードの腹部や大腿部の筋肉を広く濡らした。静子は甲冑の力で犯罪者の全裸身しがみつがされたまま、身体をふるふると震えさせる。あらわなく腹部が深い呼吸に合わせて大きく前後に動きつづけた。
「はっ、はっ、はっ……はあ……はあ……」

「まだだ、静子。俺は射精してないぞ、もっと調りつづける」
今度は左手で、ブレイクレースの尻を叩くがハキッ! と近手打ちされる。同時にペニスが強く突き上げられた。
「はっひいひいひいひいひい」

後ろの外からの衝撃と前からの体内への直撃が、静子の中でひとつになり、喜悅の大潮と化して吹き荒れる。今回も生と男根は一度しか動いていないが、静子を三度目のエクスタシーへ吹き飛ばすのに充分だった。
静子自身ほとんど動かないまま、官能の頂点へと昇りつめる。もはや恥辱の言葉をこらえることも不可能。

「イクッ!」
「いいぞー」

悶絶から躍り出る舌が、静子の顔から喉の先まで詰めまわした。喉中を唾液でべとべとにされながら、静子は泉のように淫声を噴き出す。
「イクちゃっっ! あああっっっ、またイクッ! またイクッ! イクッ! イクッ! イクッ!」

「まだだ、静子。もっともっと調り狂え!」
静子の意志を無視して、ブレイクレースが淫撃する身体の再燃する。敵の唾液まみれの愛らしい筆跡が定々、言葉にならない声をこぼした。
「あっ! くふあ、あっ! おおおっ! うっくくくくく! はん!んひあう! あひっ! あわっ!」

矢張り早に悲鳴じみたよがり声をつがせると、息がつまった。途切れ途切れの暗咽になり、呼吸が回復すると、また叫び声が連続する。そして次に次の絶頂を到達した。
「イクッ! またイクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ!」

それを何度もくりかえしたのか、黒い鞭の頭に描かれた深紅のTの文字が、静子の随量の汗に濡れた頭にコッソリと当てられた。
「いいアノコだった、静子の中に、俺のをぶちまけてやるぞ」
「あえ、ええ……」

「脳が灼ける……脳が灼ける……」
声にならない思考が、ナノマシンの中を高速で巡回する。ありえないことが、機械の脳が高熱で破壊されることを悟してしまふ。
「勇者静子よ、魔王テラーロードの精液を喰えろ」

静子の奥で、爆発的な洪水が起きた。
「あああああっっっ! ああああああイクッ!!」
「あああああっっっ! ああああああイクッ!!」

高熱の奔流が腹だけでなく、血管を流れて全身の隅々まで流れこみ、細胞のひとつひとつをテラーロードの黒い色に染められる。やうだ。
「イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ! イクッ!」

暖内に射精がつづくなか、静子の舌がまた蠢かれ、舌を押しこまれて、大量の唾液をそがれる。壁に充滿する精液同様に、唾液も胃の中から全身へ広がり、染み入ってくる気がして、身体中から悲鳴があがった。



「だめええ！ イクッ！ イキすぎて、狂っちゃうらうらッッ！」

「んんんんんん……ふふッッッ！」

長々とめく静子の脇腹を、テラーロードの両手ががちりつかんだ。奥のたくましい胴体にまわったブレイクレースの両腕と両脚がゆるみ、静子の身体が軽々と持ち上げられる。

「はあああッッ！」

女性の中心からペニスがすっぽ抜けて、亀頭の後ろを這うように精液と愛液がどぶどぶと流れ落ちた。テラーロードの裸足の前の床に、どろりとした水たまりができる。

「おお……あああああ……」

テラーロードの頭上に掲げられた静子は、がっくりと首を前に倒し、虚ろな瞳で黒輪轡に描いた赤い丁を見る。脱力した両手両足が糸の切れたマリネットさながらにぶらぶらと揺れた。船間からなおも愛液と精液の混合した粘液が垂れて、左右の内腿の素肌を伝い、膝から下の脚部活字を汚した。

「今夜はこまでだ。明日はもっとお楽しみだぞ！」

背後へ向けて、静子の身体が投げ飛ばされる。ロングソファに背中から落ちて、大きく弾んで動かなくなった。

顔が横向きになり、だらしなく開いた口から涎こもに熱い吐息がこぼれ出た。

「ああ……んん……はふう……」

進行される群衆の状態。黒馬の右側に並んで歩かれた。今はフレイブラレスに動かされているのではなく、静子の意志や申言を動かしている。だが広場の地下に格納されている武器を呼ぼうとしても反応はない。なによりテラーロードに反抗すれば、市民の列にドレッドホードたちが襲いかかり、車アングル・ウォッチ大連りが血の道になると言われた。

ウォッチランドの人々になにをするつもりですか、いたぶるのは、あたしだけでいいじゃない」

話しかける静子に、テラーロードの黒髪が笑いかける。

「住民どもにはなにをするつもりはないさ。こんな平凡な奴らを送りつてもつまらんからな。俺は見せてやりたいだけだ。自分たちの勇者がさらす恥かしい姿をな」

黒馬が脚を止めた。静子も歩みを止める。すぐ前に立つコドルフ市長が、癡せた喉が破裂せんばかりの絶叫をあげた。

「シスコ様！ わたくしは信じております！」

コドルフのすぐ後ろに並ぶ男たちが、あわてて市長にしがみつき、口をふさいだ。

「市長、おやめください！ テラーロードの怒りを買って殺されますぞ、きつあつ！」

前衛で男の指を噛んでけりほくと、老人は声をほとほとこぼる。

「アングル・ウォッチに選ばれた勇者が、敢て叛北するはずがない！ 必ずやこの外道を倒してくださるに違いない！ イーイッッッ！」

最後は声が引きつり、かすれて、死にかけの獣の野暮魔に化した。老人の懸命の叫びも、テラーロードの哄笑にかき消される。

「はははははは、勇敢だな、じいじ。だがおれはれがキャンキャン吠えても、なんの意味もないぞ。今から、おまたちの勇者が恥をさらすショーを開催だ。まずは勇者のおつぱいアソコを拝ませてやる」

テラーロードが右手の鎧を引くと、静子は事前に命じられた通りに、黒馬の前に進み出る。教会広場を出て、ウォッチランド市民が左右に並ぶ大通りの入口に立つた。

それだけで人々たちからため息があがった。そしてため息はさらに大きくなる。

フレイブラレスの頭部と下腹部と股間、左右の本腰の蓋が一度にはずれて、路面にガシャン！ ガシャガシャン！ と落ちた。昨夜と同じように、静子の胸と恥丘と大股が露出する。さやかなつのふくらみ、上品なヒップの乳輪と遠慮がちに縮こまる乳首、ふくつくした恥丘に刻まれて、ぼくぼくした粉乳、ウォッチランドの住人たちに、勇気がまだなにも知らない少女だと印象づける裸体だった。

この演出のために、テラーロードはわざわざフレイブラレスをもとに戻して、ピカピカに磨いたのだ。まばゆく輝く金属の間から色白のなめらかな肌が現れている姿は、ミスマッチなコントラストを描いて、艶めかしさよりも痛々しさを生み出している。

両手を後ろ手に拘束された静子は、胸も下半身も隠すことはできない。できるのは少しでも見える部分を減らすとつて、両脚を強く閉じて、内腿を露出なく隠蔽させることだけ。

「く……」

過去にも犯罪者に陵辱された経験はある。女性スーパードクターの宿命ともいえる。しかし大勢の群衆の前で裸になるのはじめて。全裸ではなく、情情的な遊ヒキアーマースタイルなのがいつそう情けない。

（あああ、恥ずかしい……はすかしくて死にます……）

多くの人がまぶたを開いて、静子の半裸身から顔をそむけている。コドルフもそのひとりだが、白髪頭を大きな鉤爪がつかんだ。背後に立つ黒い機械の熊が、右腕を市長の頭にのせている。

静子はあわてて声をあげた。

「皆さん、あたしを見てください！ そうしないまま殺されてしまします！ あたしのことを思ってくださいなのなら、しっかりと見てください！」

「勇者様が自分の裸を見ろと言っているんだ。見ないでアングル・ウォッチ様の神罰を、俺が下すぞ！」

背後から落ちてくるテラーロードの罵詔を聞いて、静子はさらに声を大きくした。

「お願いします！ あたしの裸を見てください！」

叫びながら静子は足を踏み出し、自分を見つめる人々の間をそそと歩いた。左右がどろどろと揺れる視線は、欲望ではなく死への恐怖と勇者への情れみに満ちている。

裸を見られるのは恥ずかしくてたまらないが、それ以上に人々にスーパードクターを不憚に感じさせる自身の不甲斐なさが哀しくてしかない。

（ああ、フレイブラなら、スターサンダーなら、オセロロなら、他のスーパードクターなら、こういう態度に出すのかしら……）

静子は歩きつづけた。背後からテラーロードが騎乗する黒馬が、金属の蹄を鳴らしてついでくる。ウォッチランドの中心から東の城門までまっすぐ伸びる車アングル・ウォッチ大通りを、全住民と恥と恥を見せながら歩きつづけた。

今は閉じられ、門をかけた東の城門の前に来ると、静子は首輪の鎖を強く引かれて立ち止まり、回れ右をした。

「歩き疲れたらどう、囃りは俺のベットに棄てやる」

開いた股間の下に、媚薬粘液まみれの黒い亀頭が来る。
（これを、あたしの中に受け入れる……）
考えるだけでもおぞましい。また身体を狂わされてしまっ

（……でも、実行するしかない）

そろそろ身体を落して、今はまだ堅く閉じたままの股間を亀頭の先端に近づけていく。昨夜と同じくプレイブレースが動きを補正して、狙いを正確に定めている。大通りに立つ人々の息を呑む音が聞こえ、テラーロードの命令で視線が自分の下半身に集中するのを抑えつこうに感じる。

ヌチャッ！と股間から漏れた音ががすぐに嘲るのが聞こえた。亀頭が閉まった肉唇の狭間に押しつけられ、媚薬粘液が内側に染み入ってくる。

おぞましい感覚に、静子は後ろ手縛りの不自由な身体をのけさせた。声を出すつもりはなかったのに、こらえきれない悲鳴が喉を震わせて勝手に飛び出す。

「ああっ！ ひいっ！ 漫みる！ 漫みこんでるっ！」

記憶に新しい昨夜の恐ろしい情景が、忘れられることを知らないナ・マシンの脳裏に鮮烈によみがえった。あふれかえる記憶に、現実のおぞましい感覚が即座に追いついてくる。

「はあうううう！ ダメダメッ！」

媚薬を吸収した秘器がひとりでに大きく開き、内側の花弁とクリトリス、そして膣口を、人造ペニスへ差し出した。

テラーロードの音が、馬上の本人の口とまたいでいる猪から聞こえた。

「勇者静子が自分のアソに、ドレッドホードの肉棒を入れるぞ！ ウォッチランドの市民は全員しつかりと見ろ！ 見てない奴は、家族皆殺しだぞ！」

声は町中のドレッドホードの怪物が中継して、車アングル・ウォッチ大通りに並ぶすべての人々に届いた。それは静子に与えられた命令でもある。

静子は自分の意志で舌を深く曲げ、股間を下降させて、膣内に硬い肉棒を挿入する。

「うっ・くっ・んんっ……」

媚薬粘液で伝わる亀頭が、狭い女の道を広げて進む。黒い肉唇が深々と突き刺さるが、すべてを体内に呑みこむには長入すぎる。

「うんく、ここまですり込まない……」

肉唇の付け根から放せんちの位置で、静子の動きが止まった。尻が猪の背から浮いてしまふ。大きくけがられた膣口に漆黒の肉唇が突き刺さっている姿が、ウォッチランドの人々にはつきりと見えている。

「おお、シス口様……」

「なんといいことだ」

「わたしたちの勇者様が……」

住民が口々に流らす言葉が、静子の股間を撃つ。その痛みも、下半身からマゾマゾのこくせり上がってくる熱い快感に打ち消された。

「ああうっ……ふああああ、いやああああ……」

金属のペニス自体は冷たく、動かない。しかし女肉で硬質の勃起を包んでいるだけで、ズキズキと震動のバルスが振動する。もちろん、ずっと静止していられるはずがなかった。テラーロードが首輪の鎖を引き、静子の身体が前に傾くと、猪が四本の脚をスキップのように動かして前進した。

「あひっ！ ひいっ！ そんなあつ！」

わざと巨体を揺さぶって歩く猪の背中、静子の全身がカクンカクンと揺らされる。すり落ちないのは、プレイブレースの^{グリー}経路が磁石のように猪の胴体にくっついているからだ。

グチュッ！ スチャッ！ ギュチュチュッ！

静子の半裸が上下に跳ね、前後左右に振りまわされるたびに、股間から漏れた摩擦音が連続して響けられる。

「あつあつ！ ふわあああ！ ダメッ！ おかしくなっちゃうっ！」

媚薬に侵蝕された官能が暴走する。猪が十メートル進んだだけで、静子は限界に達した。

「くっおああうう……んんっ……」

絶頂の言葉が出そうになり、下唇を噛んで抑えつけ、胸の内だけで叫ぶ。

イクッ！ イクラ！ イッチャッ！！

「静子、口を開け！ 勇者を崇拝するウォッチランドの奴らに、恥をさらす大声を聞かせなれ！」

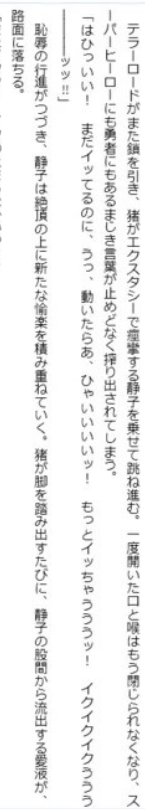
テラーロードの音が再び車アングル・ウォッチ大通りに轟いた。静子を乗せる猪の牙が長さを伸ばして、鋭い先端が近くの乗猪の心臓へ迫る。静子は決意して、下唇を噛む前歯を離した。抑えつけていた叫びが一気に解放される。

イクッ！

静子が絶頂を訴える叫びが、車アングル・ウォッチ大通りに響き渡り、並んだ市民たちの耳を叩いた。近くにいる住民だけでなく、ドレッドホードが中継して町中からエクスタシーの音が轟いた。

「イチチャカウウウウッ……」

ヒシヤヤヤアアアアッ！
黒い側面を照らす肉孔から、愛液が垂れにじみ、猪の鋼鉄の背中を濡らし、胴体の左右を流れ落ちて、路面に滲る。静子がたてる equal の水音すら、黒い機械の軀たちが増幅して広めた。



「はひっいいい！ まだイッてるのに、うっ、動いたらあ、ひゃいひゃいッ！ もっとイッちゃううッ！ イクイクイクううッ

恥辱の行進がつづき、静子は絶頂の上に新たな愉楽を積み重ねていく。猪が脚を踏み出すたびに、静子の股間から流出する愛液が、

「またイクッ！イクの止まらなひいつ!!」

デラーロードの叱責に、静子は不自由な上体を揺らして、随喜の汗に濡れた美貌を右に左に向けて、男に、女に、子供に、大人に、

「はっあああ、お願いです！ おひい！ イクッ!!!」

ピシュッ！ ジュバッ！

ジョブツ！ ドビュウウー！

シュババババ——ツツ！

案と、ウォッチランドの住民の同情の視線と悲嘆の声、そして自らが流す水音だけが、脳に刻まれていく。後に意識がはつきりすれ

そして衝撃が身体を打った。裸の胸と下腹部に、快感ではなく、硬いものにぶつかる痛みが走った。それでもぼんやりしている静子

「あああつ！」

往復したのがわからないが、とにかく街の東の端に戻っていた。見まわすとまわりにいる人間は、馬から下りて立つテラーロードだけ

「ウオッチバンドの連中は、町の反対側に集めてある。ここから先は、奴らには見せられないからな」

テラーロードが城門に近づき、閉まった扉を固定する木製の門を両手でつかんだ。大人が数人がかりでやっと持ち上げられそうな太

静子は鎖を引っぱられて、城門の外へ、堅固な城壁にかこまれた城郭都市ウォッチランドの外へ向かわされる。

$$[\cdot] = \cup \cup \cup$$

の洪水は、最初こそ衝撃だったが、すぐに意識から締め出せた。

電波にも届いたが、目の前にある山にはもう、驚愕させられる。

「とびいっぴー」

「コドルフ市街をはじめとする町の人々に聞かされた話では、ウォッチランドのいつもは開いている城門の外には、整った街並の伸びて、城壁の周囲には青々とした草原が広がっている。草原にはきれいな川が流れ、近郊の農民たちが開墾した畑が点在する。遠くには森林が残り、遠くの方々へつづく。」

はじめてウォッチランドの外に出た静子が見たのは、のどかな田舎風景ではなかった。広がる大自然でもなかった。東アングル・ウォッチ大通りでは路上にあった青い空で、白い雲も、輝く太陽も存在しなかった。

目の前にいるのは、そびえ立つ巨大な何か。

高さが六十メートルはあるウォッチランドの城壁よりも高いもの。

ナノマシン脳が高さ八十五メートルあまりと計測した。二十数階建てのビルに近い高さだ。

あまりの大きさに最初はなんなのかわからなかったが、静子は独特の形に気づいた。

「に、人間……身長八十五メートルの巨人！ なんなの？！ 作り物の巨人像？！」

呆然とする静子の耳に、テラーロードの笑い声が入った。

「ははははは。あいつは正義止めの人間さ」

第四章 雲霞をなす陵辱

静子はスーパーヒーローとして、通常の人間よりも大きなオビートと相対することもあった。それでも最大は自身を五メートルに巨大化させた仰罪者だった。高層ビルのような巨人は、静子を知る過去の記録にもなかったはずだ。また別の世界に来てしまったのではないかと思ひ、背後をふりかえると、すぐ後ろに閉じた木製の城門と石造りの城壁が存在している。間違いなくウォッチランドから外へ出たことだ。

それなら、町から巨人が見えるはずなのに!? この場所はどこなっているの?」

足の下は土ではなく、灰色のなめらかな金属だった。

巨人の脚上のはがらも、青空ではなく、やはり灰色の物質が覆っている。

かたわらに立つテラロードには驚きの様子はなく、うろたえる静子をながめて楽しんでいた。この異様すぎる情景を、当然のこととして受け取っているようだ。

「あわてなくても、何が起きているのか、あの巨人がいやでも教えてくれる!」

「どういって、あつ!」

テラロードのややつく腕を前にして、静子の華語がブラックアウトした。

体感ではほんの一瞬後に、目の前が明るくなる。

「ええっ!」

すべてが変化していた。

隣にいるテラロードが子供用の人形のように小さくなっている。

八十五メートル以上あった巨人も縮んでいた。ナノマシンの計測では八・五メートル、十分の一に縮小している。今でも十分に大きいとはいえず、サイズダウンしてはじめて気づいた。

「アングル・ウォッチ!」

巨人は教会の中に置かれて、中にフレイブグレースを秘蔵していた聖者アングル・ウォッチの銅像にうりふたつ、違いはサイズと材質だ。

目の前のアングル・ウォッチの顔は、間違いなく生きている人間の肌。銅像にそっくりの四十代らしい顔には、威厳と優しい包容力を備えた笑みが湛えられている。しかし作り物ではなく生身の人間の顔として見ると、人格の良さをわざわざらしく強調したように感じて、静子はなんともいえない唯くさを覚えた。

顔の左目の位置にある円形のアナログ時計は、銅像と違って時計が動いていた。長針と短針が指す時刻で、銅像の九時ちょうどはずれている。

身にまこっているのは、銅像と同じデザインの立派だが簡潔なデザインの上着とスボンと靴。衣服は布で作られて、色はどれも白い。なんとも白衣を真実味にアレンジしたような印象を与える。

静子は困惑しながらも、ウォッチランドの守護神への敬意をこめて、巨人のアングル・ウォッチに声をかけた。八メートルも上の耳に届くように大きく張り上げる。

「あなたはアングル・ウォッチなのですか? ウォッチランドを導くシステムを造った古代の科学者でしょうか?」

見上げる先で、大きな顔がニコリと慈愛あふれる笑みを作った。

「その通り。私はウォッチランドを創造したアングル・ウォッチだよ。ようやく再会できたね、勇者ズ!」

「えっ? 再会とはどういうこと、ああ?」

八・五メートルの巨顔が膝を折って、右手を静子へ向かつて伸ばしてきた。静子は本能的に危険を感じて逃げようとする。だが動けない。またもフレイブグレースが硬直して、手足が拘束された。

巨大な手に胴体をつかまれて、思わずスーパーヒーローらしくからぬ悲鳴を発してしまふ。

「きやあつ!」

足が金属の地面を離れた。美少女フィギュアのように軽々と持ち上げられ、空中を上昇してアングル・ウォッチの大きな顔の前に運ばれる。

静子の身体と変わらない長さの顔の中で、人間をひと呑みにできる顔がバクバクと動き、大音響がワーンと轟いた。

「サンダークラブスのローステパイスと呼んだほうがいいかな。いやいや。私ときみの間では本名で呼ぶべきだろうね。北原静子ちゃん」

予想外の言葉で鼓膜をぶ叩かれて、静子は精一杯の大ボリウムで返した。

「どうして苗字まで知っているのですか! ウォッチランドに来てから、苗字は誰にも教えていません!」

アングル・ウォッチの好人物な顔の造形はそのままに、笑みがいやらしい悪意の満るものに変貌した。

「私は知っているんだよ。なぜなら私はかわいい北原静子ちゃんの叔父様の瀬澤郷治だからね」

「な……」

静子は驚愕で言葉を詰まらせた。よく知っている瀬澤郷治という人物と、アングル・ウォッチはまったく顔が違う。声も違って聞こえる。しかし、静子ちゃんと呼ぶ口調はまさに瀬澤郷治のもの。

「郷治おじさん……生きていたのね……よかった」

アングル・ウォッチの邪悪な笑顔に、明確な皮肉の色が透れた。

「もちろん生きていたよ。あとき静子ちゃんにほんとに殺されかけたけど、人殺しにならなくて、本当によかったね、静子ちゃん」

静子の脳裏に、人生で最も忌まわしい一年の記憶が高速再生された。

母は幼いころに病死した。父親はいくつもの特許による豊かな財産があったので、優秀なシッターとハウスキーパーを雇った。父も忙しなかった。娘との生活を大切にしたい。静子は不自由することなく幸せに少女へと成長した。

不幸は突然訪れた。静子は父の乗客の事故に巻き込まれて、脳と神経系を損傷した。父は自分が開発中だったナノマシンを脳の体内に入れて、脳と神経の代替にすることで生命を救った。

静子は前例のない治療のために、外出することができず、父の研究所の中で暮らした。いよいよ治療でリハビリが終了するというときに、父が交通事故で亡くなった。

父の死後、研究所はいつの間にか、静子の叔父の遺言で静子のもものになっていた。叔父がいつても静子とは血縁はない。父の妹の夫だ。静子も優秀な科学者だったが、父には劣ると静子は考えている。

静子は父の研究所を継ぐだけなく、静子の法的後見人となった。そして本来なら外出できるようになった静子を研究所に監禁して、モルモットにしたのだ。

監禁されてから一年がたったころに静子は気づいた。静子が父の研究を犯罪者に売っている。このままでは父の研究の生きた精華である自分も危ないと感じて、密かに製作したロースデバイスアーマーのプロトタイプを使って、研究所の一部を爆破して逃出したのだ。

あてもなくさまよっていた静子は、偶然、日向輝と出会い、サンダークラブに身を寄せた。チームの一員となり、スーパーヒーローのロースデバイスになった。

研究所の爆発は、当然ながら警察の捜査が入った。静子はサンダークラブを通じて、日本を代表するスーパーヒーローチームのジャスティスカーカスの法律顧問を担当する弁護士事務所と協力してもらい、研究所の破壊は事故ということにした。もちろん静子が普通の人間ではないことも、ロースデバイスであることも、警察には隠した。

後で知ったが、静子のために尽力してくれた弁護士事務所の所長も、日本のスーパーヒーロー黎明期に、ロの悪さで評判だった悪徳弁護士と名乗るヒーローだった。だからジャスティスカーカスのメンバーたちは所長に正体を明かしていたのだ。

警察の捜査によって、真澄静治が犯罪組織の協力者であることが判明した。しかし爆破された研究所から静治は姿を消していた。静子は叔父を殺してしまったのではないかと心配したが、今に至るまで死体は発見されていない。

★

「実際に、私は静子ちゃんが起こした大爆発で死ぬところだった。取引していた犯罪組織に互換の下から救出されて、なんとか生きながらえたんだ。見ての通り、左目を失った。警察の追及を逃れるために、顔も髪形して別人に変えたよ。それだけじゃない。服の上からではわからないだろうが、身体ほとんどが機械化されて、今や立派なサイボッドだよ」

アングル・ウォッチの皮肉めかした言葉を聞かされたながら、静子は本気で、静治が生きていることに安堵していた。

叔父は自分を監禁して、父の研究を悪人に売り渡した。憎んでもあまりある仇敵だ。それでも死なせることは良いこない。

「静治おじさんがアングル・ウォッチなら、ウォッチランドはいつたいたなんですか？ 異世界にきて、ウォッチランドの守護聖人の力を借りて、どういっつもですか？」

アングル・ウォッチが手をひねり、手の中の静子の向きを変えた。

眼下に広がる光景に、静子は息を呑んだ。高さ六十メートルの石の壁が大きな円形を造り、ドーム状の白い屋根が覆っている。小さなテラードが石壁にある小さな城門を開けて、中に入り、また城門が閉まった。

静子が一瞬で理解しながらも、納得できないところを、アングル・ウォッチが告げた。

「あのミニチュアがウォッチランドだよ。私が通ったんだ。町から見える空は、ドーム天井の映像さ。ここは異世界じゃない。日本国内の某所にある。私が住んでいる相模の秘密基地の中だよ」

「それなら、ウォッチランドに住んでいる人たちは同僚なの？」

「もちろん市民たちも異世界の人間じゃないよ。ここ数年の間に、日本で失踪したことになる人間だよ。私が脳をいじくって、自分たちが先祖代々ウォッチランドに住んでいると思いこんでいるだけなんだ。だから日本人なのに中世ヨーロッパみたいな生活をしているんだよ」

「……でも、それなら」

「私が開発した物質を縮小する装置で、ウォッチランドの住民は身長二センチほどに小さくしてある。ウォッチランドにいた静子ちゃんもそのサイズだった」

「でも」

「今は静子ちゃんのサイズを変更して身長一センチにした。つまり私は巨人になったのではなく、以前と変わらず百七センチチビとこの身長というのだ。ウォッチランドの城壁の高さも、中にいるときには六十メートルに見えるが、実際には百一センチチビほどなんだよ」

「なんのために、こんなことをしてるのですか？」

「ウォッチランド自体は組織のための実験だね。実験をしているうちに思いついたんだよ。ウォッチランドを使って、静子ちゃんを自分の手に戻すことができるってね。ただ再会するのはつまらないから、スーパーヒーローになった静子ちゃんにふさわしいドッキリを仕掛けたかった」

「もしかして銀座のトラック事故も、静治おじさんが仕掛けたのですか？」

「さすが静子ちゃんは理解が速いね。ロースデバイスを誘い出すために、私が起こした、この計画のためにテラード君にも協力してもらったんだよ。テラード君は自分の死を偽装して海外に逃出した後は、私と同じ組織に属している。何年も別人として活動していたが、久しぶりに故郷のテラードを復活してもらったよ」

いかにも愉快そうに静子と言葉を交わすアングル・ウォッチの語り口は、記憶に残る叔父そのものだ。

「サプライズドッキリの準備かしもすんだから、これからはお前のように私と静子ちゃんて仲良く暮らそうね」

ソツとするほどの巨大な顔面の笑みで、右手の中の小さな静子に向ける。

「そのためにかわいい静子ちゃんを、もっともっとかわいい人形にしたんだからね」

「人形！」

叔父の言葉に、静子の意識に新たな記憶映像が呼び出された。叔父が研究所にいたときには、静子は実験室からほとんど出してもらえなかったが、ほんの隙間、叔父の私室を覗いたことがあった。

室内には科学者らしい装置といっしょに多数の人影が飾られていた。映画やアニメのキャラクターフィギュアや、デフォルメされた子供向けの玩具の人影ではなく、写実的な球体関節人形ばかりが、床や棚で思い思いのポーズをつけて並んでいた。

人の趣味をどう言っても、静子にはない。知り合ったスーパヒーローたちのなかにも人形をコレクションしているだけなく、趣味として自分で製作している男性ヒーローがいる。しかし自分や他の人々がコレクションの人形と同じあつかいをされるなく、絶対に受け入れられない。

「郷治おじさんは間違ってます！人間を縮小する装置を開発したのは僕いかなだと思えます。素晴らしい使用法もあるはずですが、でもウォッチランドのような使い方をするのは許せない！」

「ふふふ。じつにスーパヒーローらしい台詞だね。でも、許せないならどうするのかね。今の静子ちゃんは愛らしい人形サイズで、しかもプレイグレースで身体を自由に動かされているんだ。静子ちゃんを自由にできるのは、この私だけだよ。私に勝たなくては生きていけない状態だ。私の生きた人形でなくて、なんなのかな」

「黒猫なことを言わないで！」

慣りのままだをあげても、実際はアングル・ウォッチの言う通りだった。自分が人形サイズで、叔父の手の中に納まったまま、なに

もできないでいる。自由になるのは言葉だけで。

「郷治おじさん、これ以上罪を重ねるのはやめてください！」

言葉を重ねながら、この異常な状況を打破する方法を考える静子の頭上で、強烈な破壊音が轟いた。

「なに!!」

「なんだ？」

静子とアングル・ウォッチがそろって顔を上げると、アングル・ウォッチの背後の隠れた位置の天井が崩れた。天井に大きく開いた穴から三つの影が次々と現れ、床に降り立つ。

「動くな！」

激しく叫んだのはフレア。

フレアは、本名は日向燐。見た目は二十歳前後

短髪に縛られた凛とした美貌。チアリーダーの衣装に似た白いミニスカートのコスチューム。豊かに盛り上がった胸には黄色い炎が描かれ、背中には漆黒のマントをひるがえている。

オフビート能力は人間をはるかに超える身体能力と飛行能力。天井を破壊して穴を開けたのも、フレアのキックの一撃だった。

「サンダー・クラップスです」

悪ふかにチームネームを乗っけたのはスターサンダー。

スターサンダーはサンダー・クラップスのリーダー。本名は鈴置麗。年齢は二十代半ば。

大人の女らしい美貌に、赤いアイマスクを装着。

チームで一番の巨乳を誇る豊満なプロポーションを、肌を密着してボディラインを鮮明に浮き上がらせるボディスーツに包んでいる。赤い地に青い稲妻模様走るボディスーツは、胴体の中心がへそまで透明になっていて、乳房の半分があらわになる。ボディスーツから伸びるのちりした素肌の脚線美とあいまって、様々なスーパヒーローランキングのセクシー部門上位の常連だ。

身体から電気を発して、自由自在に操るのがオフビート能力。

「おとなしく投降しろ！」

オセロットが獣のうなりを発する。

本名は柳イサベラ美果。愛称はベル。ハイティーン。

魔法でジャーカーに似た獣人に変身する。

今も全身が黄色い地に黒い斑点模様をちりばめた獣毛に被われ、尻から長いしっぽを垂らした姿。頭の上には三角形の猫耳が突き出ている。体毛で隠されているが、じつは獣人に変身中は全裸であることは、世間には秘密である。

獣人に変身して人間以上の敏捷さを発揮するだけでなく、南アメリカの動植物の精霊を召喚するシャーマンでもある。

背後からかけられた三人の女性スーパヒーローの声に、アングル・ウォッチがふりかえり、右手の静子を前に突き出した。

フレア、スターサンダー、オセロットはいっせいに目を剥いた。

「なっ！」

「えええ！」

「どうなってるの？」

三人は静子の失踪現場に残っていた小型の探索機械のデータを解析して、この秘密基地を探り当てて来た。だがまさか静子が人形サイズにされているとは想像もしていない。フレアたちにとっては名も知らぬ犯罪者が、右手に持つ静子を有名俳優の印刷さながらに振るがえす。

「サンダー・クラップスの諸君こそ、下手に動いたら仲間を誘いつぶすけど、よいのかね」

スターサンダーは無言でオフビート能力を放った。見えない電流がブーツの足先から放たれ、意志に従ってアングル・ウォッチの白い靴を自けて進んだ。

だが電流はアングル・ウォッチの靴に触れる直前で止まり、パチパチと青白い電光となって消えてしまふ。アングル・ウォッチの作り物の好人物線に、勝ち誇った笑みがくつきりと表れる。

「こう見えても悪の天才科学者だね。静子ちゃんを手に入れるために、サンダー・クラップスの対策は練じてあるんだよ」

フレアが床を蹴り、常人の目には捉えられないスピードでアングル・ウォッチとの距離をつめた。

「うっ！」

なににもないはずの空間に、まるでほろかいエアマットに全身を突っこませたような感覚があり、フレアはボヨンと跳ね返されてしまう。

アングル・ウォッチがせせら笑つ。

「だから言っただろう。悪の科学の力を見くびらないでほしいね」

「科学自慢なら、これでいいだ！」

オセロットが獣の咆哮をあげ、両手をアングル・ウォッチへ向けて差し出した。組み合わせた十本の指から濃緑色の大蛇が出現して、空中を飛行する。アナコンダは世界最大の大蛇のひとつだが、オセロットが召喚した精霊はさらに大きく、大人をひと呑みできるほど口を開いて、アングル・ウォッチに襲いかかる。だが牙が届く前に、大蛇の精霊がき消された。

「どうしてなの?」

「遅くなった。自己紹介をしよう。私はアングル・ウォッチ、静子ちゃんのチームメイトのきみたちなら話を聞いていると思うが、静子ちゃんの救済だよ。誰はいじつたがね」

「避難所なのかな?」

「生きていたの?」

「今まで生きてた?」

「アングル・ウォッチの手に、アングル・ウォッチが誇らしげに胸を張る。

「なにを言いたかという。私は個人営業の犯罪者じゃないんだ。国際犯罪組織で地位のある人間だね。組織の力で魔法に対する防御策も用意できる。それにスーパーヒーローに突っつける人達も。ここにはたっぷりいるんだ」

一度ではあきらめずに再び飛び出すとするとするフレアと、新たな精霊を召喚しようとするオセロットの動きが止まった。

「私の背後のドームの中にはミニチュアの町があり、身長二センチに縮小した人間が大勢閉じこめてある。今すぐ致死性の毒力入を注入するか、壊破してもいいんだよ」

信じ難い言葉はすれの言葉を聞かされて、三人はどまどしている。現実目の前に小さな静子と突きつけられているのだから、否定はできない。

アングル・ウォッチの手中で、静子は懸命に叫んだ。

「本当です! ドームの中には小さくされた人々がいます」

「わかったがね。スーパーヒーローならもう私に手出しをできない。ではサダー・クラブスの諸君はなにをしようとしていたまえ、私の言葉が真実だと教えてやろう」

アングル・ウォッチがとくになにかをしたように見えなかったが、周囲から虫の羽音が接近した。四方から蚊柱のような小さな黒い虫の集団が飛んできて、フレア、スター・サダー、オセロットにたかる。

自分の身体にとまる虫の集団を目にして、フレアは驚愕の叫びをあげた。

「これ、虫じゃない! 人間だ!」

白地に黄色い炎を描くコスチュームの胸にとまる多数の黒いものは、身体にびつたりした黒い服を着た男たち。身長は二センチほどで、胸につけた小さな箱から塊の題にそっくりのものが生えている。同一の衣装と装置の男たちだが、注視すればひとりひとり顔が違い、個性があるのがなんとも気持ち悪い。

「彼らは組織の人員から選び出し、私の縮小装置で送り上げた人間体部隊だ」

フレアだけでなく、スター・サダーとオセロットも同様だ。

赤いボディスーツが密着する豊かな乳房が、小さなマンフライたちで黒く染まった。

オセロットは胸体のふさふさの獣毛にマンフライたちがぶら下がり、毛の間に潜りこんでいく。

「ひいひい! 身体に熱いわ!」

「ウミヤアア! 身体に熱いな!」

クロテスな怪物に姿を変えるオビート犯罪者には何度も遭遇したスーパーヒーローだったが、これほど生理的嫌悪を催させる事柄ははじめてだ。

「息をつけるんだよ、サダー・クラブスの諸君。彼らは私の配下の普通の人間を縮小しただけだから、手でふり払うだけで、死ぬのもしれないからね」

「なんだと!」

「なんといこと!」

「ミヤアアアア!」

三人が少しもマンフライたちを叩き落とそうと振り上げた手を止めた。

「私の物体縮小装置は、本来はそういう作業員を生産するものだ。爆弾も兵器も小さくして、どこへでも持ちこみ放逐だからね。二人とも大勢の人間がいることも忘れずに、人形になつちぢりてくれているんだ」

どうしようもなく動きを止めたフレアのコスチュームの胸の上で、マンフライたちが三つのグループに分かれ、それぞれ一定の方向へ移動しはじめた。

「うあ、やめろ!」

フレアの叫びを無視して、コスチュームの首と肩の開口部から内側へと小さな男たちが続々と入ってくる。コスチュームの中に潜りこんだ男たちが、大きな公園に築かれた小山を登るように、両手両足をなめらかな乳房の表面に貼りつけて進んでいく。

堤と名付けられているだけあって、統一の黒いクロップとブーツは対象物につけて、簡単に滑り落ちない仕組みになっていた。その効果が、素肌にたかれるフレアには耐え難い痒さとして感じる。フレアの肉体は素手でコンクリートの壁を粉砕して、銃弾が当たっても痛つたかないが、鈍感なわけではない。打撃や衝撃、火炎や寒気への耐性は高いが、くすぐったさは普通の人間と同じ。

大勢のマンフライたちが左右の胸をわがもの顔で這いまわる感統は、不快と気持ちよさの微妙な境界線を往復している。

「くっ、だめだ!」

フレアは顔を引きつらせた。両腕をまっすぐ膝上へ伸ばした。そうしないとい両手で胸を叩き、コスチュームの中のマンフライたちを押してしまいかねない。

アングル・ウォッチにマンフライの意図はよくわかった。こいつも他の犯罪者と同じだ。女性スーパーヒーローを嫌つけるのではなく、辱めるのが目的だ。

わかっていても、体恤したことのない痒さ。立ったままの身体がくねってしまふ。

「ううう……んんん……ひっ!」

左右の乳房にマンフライの手がかかった。一人ではなく、四方八方から何本もの塊グローブが一斉にピンクの肉面を押し当てられ、寄つてたかつて「シリコン」にすられる。

「あつひいいいいいっ!」

[illegible]



オセロットは四つん這いになり、しっぽをピンと立てフルフルと揺るがせた。獣毛の下でマンフライに隠れ、娘を襲った。女性器の奥深くに侵入される。体験したことのないエクスタシーの領域へ突入した。

「ミューアアアアッ！ イクッ！」

膝がグンッと伸びて、届く遠くまで尻がカクカクと小刻みに揺る。

「ボクもイクミューアアアッ！！」

「プシッ！ プシユッ！ ビシヤアアアアアアッ！」

太腿の間を穿つ白い獣毛の中から淫音が派手に飛び散り、押し出された三工作員が長い毛にふさがった。

スターサンダーは床に膝をつき、赤いボディスーツがびっちょりと貼つく豊胸が円を描くように回った。華麗な巨乳も上下左右に弾んで止まらない。コスチュームの胸を半身では、マンフライの集団がうよよと囂っている様子が浮き上がっている。

「くうおおおお、わたくしもイッてしまわあー！」

スターサンダーの身体が大きく反って、両手を背後の床につき、下腹部をグッと前へ突き出した。

「イクッ！！ イクッイクイクイク！！ ほっほおおおおおおおっうっうっ！！」

突き出した股間が上下に乱舞して、左右の太腿をローリングする透明な材質の内側に、あふれた絶頂の蜜液が広がっていた。

チームメイトたちの凄惨な動態を、静子は叔父の手に握られて見せつけられる。

「みんな！ 騒ぎすぎ！」

官能の頂点を達した三人の叫びと、傍観するしかない静子の悲鳴が室内に反響するなかで、アンクル・ウォッチが好きな音楽を聴いているようにうつろった顔を返へけた。

「静子ちゃんのチームメイトは、みんな集めてたんだね。私たち二人だけで楽しい人形遊びしようじゃないか！」

口真にじも淫らな欲望を浴びせられて、静子は悲鳴をあげる。

「あたしたちは姪と叔父です！」

「静子ちゃんとは血がつながっていないだろう。もっとも血がつながっていても、私は全然気にしないがね！」

カコンと小さな音がして、床の一部に振動が走った。アンクル・ウォッチが立ち、ウォッチランドのミニチュアが乗る部分の床が下降をはじめた。

「ローズデバイス！ あおおっ！」

「ローズ！ きゃうん！」

「ミッイアアア！」

チームメイトを気づかう叫びが、新たな雑音に変化した。フレアたちは絶頂した後マンフライに犯されつつけている。しかし二人の声は、床に開いた穴が自動的にふさがれて、静子の目に届かなくなった。

静子自身には疑問が見えないが、アングル・ウォッチがじつくりと覗きこんで、恥辱の描写をした。

「静子ちゃんのお花はきれいに開いているよ。私に詰められて開花したんだね。私の唾液に濡れて、肉茎もクリトリスもキラキラと輝いていて、とっても綺麗だ。これこそ遠のこもっちゃん形だよ！」

アングル・ウォッチが上着のポケットから、黒い箱ほどのサイズのケースを出した。蓋を開けると、中に白い綿棒が並んでいる。この特性の綿棒で、静子ちゃんをたっぷりとみだらせてあげよう。

動けない静子の顔の前に、一本だけつまみ上げた綿棒の先端を突きつけられる。白い棒がじつくりと濡れているのがわかった。

「またいやらしい薬を！」

「これはたのローションだよ。エッチなお店で使っている海藻由来の天然ものだ。すでに静子ちゃんの身体にはたっぷりと媚薬が浸透しているから、今さら綿棒を使う必要がないからね！」

いかれた叔父がどんなつもりで言っているのかは知れないが、静子には侮辱と屈辱の言葉でしかなかった。

「そんなことはありません！今さっきも静子ちゃんに身体を詰められて、気持ち悪いだけだった！」

それは身体の外側を味わっただけだからだよ、身体の内側は違う！」

静子の顔の前から綿棒が消えた。M字開脚の中心へと移動して、しっとりとした肉花のさらなる中心へと押しつけられる。ローションをまじった綿棒で、狭い膣口がヌルリと押し広げられた。

「きひいいいっ！」

反射的に膣壁がキュッと収縮して、異物の侵入を防ごうとするが、巨人の腕刀には抗えない。綿棒の軸よりも膨らんだ頭の部分が、すばまっした膣の中に強引に押し入れられた。

「あぐっ！」

テラーロードに犯されたときに感じた、媚薬由来の猛烈な疼きはなかった。最初は無理やりな異物挿入に苦痛の電撃が走った。しかしすぐに膣内がふっふつと泡立つように、堅まなない心地よさが生まれはじめる。イメージの中の泡がプチプチと弾けるたびに、快感が飛び散り、愉悅が積み重なって増幅していく。

「あふ、はああ、こ、こんな……うんんっ……はうっ！」

装甲に固定されていない膣がもじもじと蠢く。呼吸が大きくなるとともに、なめらかな白い膣が盛り上がりつつは、べこっとなごり、M字開脚を作る両脚の内股の筋肉が、せつなげにブルブルとわなわなした。

「ほつら、言った通りだろう。綿棒を入れてただけで感じているじゃないか！」

「違う！違う違うっ、あんん……はふ……」

アングル・ウォッチが好人物顔にはみさわしくない毒々しい笑みで、にんまりと姪を見下ろした。

「さあ、綿棒を動かすぞ、かわいい人形の静子ちゃんはどうなるんだろうね！」

言葉とともに、左手で静子の肩を押さえた。右手の指を器用に使い、綿棒にひねりを加えながら前後に動かはしめる。

「あひああああーダ、ダメえええ、ほっああああー！」

静子の叫びの音色が明確に変化した。体内を乱雑にえぐられ、女肉を暴力的にかき混ぜられ、本来なら苦痛に苛まれるはず。しかし静子の肉体は静子の意志を裏切り、悦楽を生み出す。綿棒に女性器の中を隠辱されるたびに、湧けるような熱い蜜が膣の奥から湧き上がってくるように感じる。

（ああ、綿棒なんかに！）

生身のペニスや、男性器を使わずに淫靡に犯されるのもつらいが、綿棒という性行為となんの関係もないしろものに、身体をいいように隠られているのはもど心が削られる。

（このまま綿棒に犯されてイっちゃっ！）

だが、このままではすまされなかった。アングル・ウォッチが綿棒を隠に挿しこんだまま指を離し、新たな綿棒を取り出した。白い柄が突き出ている女性器のすぐ下の肛門に、もう一本のローションに濡れた先端が押し当てられる。すばまっした尻の蜜が刺激に反応して、よりきつく閉じた。

「あつ、そこは！」

「静子ちゃんはアナルセックスの経験はあるかい？」

「……………」

答えられない。幾分ながら、静子は悪魔たちに前だけでなく後ろの肉孔も賣られた過去があった。これもまた女性入「ハービード」の新しい裏面と書えるだろうか。

「静子ちゃんのお尻が処女でなくても、私はまったく気にしないよ！」

「やめて、ああおう！」

硬くすばまっした肛門を、一気に突破して、綿棒の膨らんだ頭が尻の中にズブリと入りこんだ。鮮烈な圧迫感が尻の中にわだかまり、張りつめた風船のように弾けそうだった。

「んひいいいっ！」

尻の中で綿棒が軋れはじめ、膣の粘膜をかきまわされる。静子のナノマシン脳のデータベースにある多彩な刺激でも表せない感覚が、尻から全身に轟く。

「濡れる！きひいああああ！お尻が濡れちゃう！」

自分の肉体を破壊される恐怖の叫びが、喉の奥から飛び出た。人間をはるかに超える破壊的な肉体を持つフレアや、魔力に濡られたオセロットとは違い、静子は脳と神経系以外の肉体は普通のハイティーンの少女でしかない。巨人の手で内臓に異物を突っこまれて動かされるなど、どう考えても危険すぎる行為だ。

それなのに思いもよらない気持ちよさが湧き出して、冷たい恐怖を溶かそつとする。いつの間にか肛門から腫まで媚薬に置かれて、快感を生み出す器官にされている。

（お尻で感じているとき、静子ちゃんに知られてはダメッ！）

「あ、はああ……へうううっ……はんんん」

姪が顔をのけぞらせて熱い雫を流らすのを、叔父が聞き逃さない。手につけた集音機と耳のスピーカーが、小さく愛らしい人形の淫らかな声を増幅してくれる。

「ほら、やっぱりお尻で感じている。静子ちゃんも思った通りのかわいいエッチな人形だよ！」

「違います！あたしは静子おじさんだと思っっているような、あひっいいいいいっ！」

アンクル・ウォッチが右手の指の間に二本の綿棒を挟み、同時に前後に動かした。

静子の尻と女性器の中を、綿棒の端で同じリズムでえぐる。今までの淫楽が軽いアイトリングだったというより、二筋の肉尻が灼熱のマグマのごとく体内を轟々と占領していく。

「くっっっ！ あうおおおおっ！ いやああっ！」

「気持ちよくないですっ！ はおおお！ 全然、気持ちよくないっ！ あんんんっ！」

二つのいやらしくて小さな穴を、いっしょに愛撫される気持はどうか。気持ちよくてたまらないだろっ！」

否定の言葉をくりかえしながら、静子は歓喜の熱い汗に濡れた美腿を引きつら、左右に振りたくる。汗の粒が四散して、横たわるドームの白い表面に染みを作った。

「おおお、はっんんん！ 感じないです！ はううっ、あたしは感じませんんんん、んのおおおおっ！」

言葉とは裏腹に、上下に並ぶ女肉の秘道に二本の綿棒が走るたびに、深らな滑りが流れ狂い、圧倒的な快感で全身の細胞を燃やした。濡い粘液を挟んで二つの綿棒の端がこすれ合い、互いの存在感を主張しつと、静子の動けない全身がビクビクと蠕動する。

「ううん、感じてない！ はっあああ、違うっ！ 違うっ！ 違いますっ！ 違いますっ！ あひひひひひっ！」

隣番者が自分とは無関係の悪党なら、とくに屈辱の言葉を吐いてたがもれない。『気持ちいい』と快感を認める叫びを連呼していたかもしれない。叔父には、寵姫御治という人間には、絶対に言いたくなかった。

「気持ちよくないかニイイイイー イイッッ！」

否定の言葉を叫んで、静子は絶頂へと高く飛翔させられた。静子の全身が濃絶なエクスターの色に染まり、本物の人形のように硬くこわばる。

「イイイイー イイイーンはあああああ……」

官能の大海がどどとと解れて、静子は真っ白な光の中を漂遊う。数秒後にこわばりがほぐれて、全身の筋肉がどろどろと温かく弛緩した。まがたを開いた目から淫靡の涙がこぼれ、開いた唇の端から自然に涎が流れる。涙と唾液が顔を伝い、ウォッチランドのドーム屋根に落ちていく。

「……あああ……」

自分自身の汗、涙、唾液に濡れた美腿に、アンクル・ウォッチが大きな膝を寄せて、舌で舐めまわした。

「んぶっ、や、やめて！ わんんん、ぶぶっ！」

悲鳴をあげる静子の顔から様々な体液が紙め取られ、かわりにベチャベチャと叔父の唾液がなすつづけられた。

「静子ちゃん、果てたね。絶頂を極めたね、とつてもかわいくて、舐めてあげなくてはならないんだよ！」

スッ！ スボッ！ 濡れた摩擦音を鳴らして、腰と肛門から同時に二本の綿棒が引き抜かれた。

「きひひひひあああっ！」

静子は叫び、綿棒が抜けて開いたままの女性器からは、熱い水音がほとほとした。

「プシャアアア！ ビシユッ！ ジュバッ！」

女室を横き出しつづける肉花を、アンクル・ウォッチの舌先がふさいだ。女の急所に感じる生々しい叔父の肉の感触が、静子の背筋を戦慄で震わせる。

「なっ！ やっ、いやああっ！」

さまたげられた水流が四方に飛び散り、静子自身の腰や両脚を濡らし、アンクル・ウォッチの舌のザラザラした表面を流れた。

「静子ちゃんの絶頂のシユースは最高に美味しー！」

叔父が発する愛持声に、静子は充てる言葉を待たなかった。ただ荒い息を吐くのみだ。全身が自身の愛液とアンクル・ウォッチの唾液にまみれて、不快な匂いが鼻から肺へ入ってくるのがたまらない。

「さあ、私のために、静子ちゃんはもっと羞恥な人形劇を演じて！」

アンクル・ウォッチが上着のポケットから、新たな物を出して、M字開脚のポーズで横たわる静子の前に置いた。

「な、なんなの？！」

それは人形だった。かつて叔父の私室にコレクションされていた球体関節人形ではなく、アクションフィギュアに近い人形が二本の足で、ゆるやかな球面のドーム屋根に安定してすくくく立っている。髪をつけた姿勢で立つサイズは、今の静子より少し背が高いほど。

人形はフレアを再現していた。

スーパーヒーローらしい力強くすました顔。ざっくりしたショートヘア。おなじみの白いチアリーダー風ミニスカートのコスチューム。豊かな胸には黄色い炎のシンボル。

まさしく世間に知られているスーパーヒーローとしてのフレアの再現だ。

スーパーヒーローの人形は珍しくない。人気のある新旧のヒーローはたいていアクションフィギュア化されて、いろんなメーカーから市販されている。有名なスーパーヒーローたちのフィギュアセットを勝手に販売した会社が、当のヒーローたちに譴責されるという珍事件もあった。

サンダー・クラップスも玩具会社にフィギュアの製造販売を認可していて、利益は慈善団体に寄付している。ローズデバイスのフィギュアも廉価版からマニア向けのギミック付き豪華仕様まで何種類も出ている。

静子の前に立つフレアのフィギュアは、今まで見たどの人形よりも精巧で、顔の造形も、髪型も、髪や肌の色合いも、体形も、白いコスチュームも本物に生写した。誰よりもフレアのそばにいる静子だからこそ、恐つしいほど似ているとわかる。

「いったい、なんのつもり、ああっ！」

フレア人形が直立不動の姿勢を崩し、静子に跳ひかかってきた。

「ロボット！」

同時に、静子を拘束していたプレイグレースの硬直が解けた。自由に動けるようになり、急いで立ち上がるつもりだが、両穴絶頂を極めさせられた身体は気鬱く、のろのろとしか動けない。たちまちフレア人形に両肩をつかれ、強引に押し下げられた。

「痛いっ！」

フレア人形の動きは人間と比べて遜色ないスムーズなのに、表情だけが変わらない。遅々しく頼りがいのあるすまし顔のまま、静子を襲っている。

「勝てない！」

今のプレイグレースは静子の動作をままたげないが、パワーもスピードも増幅されない。フレア人形の機械ならではの強靱な腕力で、ドーム屋根にひざすかされた。

静子の顔の前に、フレア人形の白いミスカートが位置する。

スカートが内側から持ち上がり、裾がまくれて、中から肌色の襦袢姿を現した。

「あっ！」

ベニス！ 襦袢に再現された男性器が、静子の顔に突きつけられる。

どうして、フレアに男があることを、郷治おじさんが知っているの？

悪の科学者に創造された人造人間であるフレアには男性器がある。普段は体内に収納されているが、クリトリスのすぐ上の位置から複雑な男根を勃起させることができる。創造者の定めた欲望の現れであり、フレアにとっては自分がオフェート犯罪者に造られたという忌まわしい事実の象徴に他ならない。

今はフレアの意志でベニスを出すこともできるが、自分から望んで勃起させることはない。同性の恋人である静子と、フレアにベニスは必要ないと考えている。二人で愛し合うときもつけて使わない。

なによりフレアに男性器があることは、世間に知られてはならない秘密だった。

（郷治おじさんに秘密がばれたの！）

と、危惧したが、すぐに気づいた。

（違うわ。本物のフレアとは形が違ってる。もし本当に郷治おじさんがフレアの秘密を知っているのなら、先主に再現するはず）

静子の指差を要する言葉を、すぐそばから淫アクシオン・フィギュアを監視するアングル・ウォッチが告げた。

フレアちゃんにつけたベニスは、私のベニスから形を取ったものだ。サイズは小さいが完璧な再現だ！」

力説する叔父の鼻息が、静子の全身に吹きつけてくる。巨大な叔父の顔が隠れることなく自慢するのを目にして、静子は嘆くしかない。

「どこまで驚かすんですか！ あ、やめっ、みんな」

静子の頬に、フレア人形の亀頭が押しつけられた。人間の男根とは感覚が違うが、差のかい材質だ。体温より低い温度が頬に伝わり、不快感を催す。

亀頭が頬から横へ滑り、口の中に押し入ろうとする。

「んむっ！」

静子は唇と舌を固く閉じて、恋人を膣差するモノの侵入を防ごうとするが、フレア人形の指で頬を強くつかまれて口をこじ開けられた。即座に亀頭がスボッと溜りこんでくる。

「むんっつらうっ！」

「じつかりフレアのベニスをしゃぶってあげるんだよ。すぐに静子ちゃんの中にはいるんだからね」

アングル・ウォッチの言葉に従ったのは、フレア人形のほう。再び両手で静子の胸をつかみ、同じ表情のまま腰を巧みにグラインドさせて、口の中で亀頭に唾液をまがしていく。

口内で轟く亀頭の後ろの部分に、静子は前歯で思いっきり噛みついた。しかし肉粋の柔らかい表面の中には硬くて太い芯があり、文字通り歯が立たなかった。

「うんっ！ あぶっ！ ぐぐぐぐっ！」

（最悪！ 最低っ！ 敵が造った恋人の偽物に無理やりされるなんて！）

憤怒の炎に燃える両手で力の限りにフレア人形の胸を押ししても、びくともしない。どうにもできないまま、愛する人のコビーにさるイラマチオが繰り返される。

「うんっつ！ むぐぐぐふふっ！ んぐぐぐふ！」

「要敵だよ、静子ちゃん。チームメイトのベニスを啜っている顔がとてちかしくて、私はたまらないよ」

叔父から飛んできた鼓膜がビリビリする大声が、口を犯される嫌悪をさらに増幅させる。フレア人形の本体そっくりの顔が、怒りを増大させる。

「ぶあっつ！」

口の陵辱から解放されたのは、フレア人形が自ら腰を引いて、男根を抜いたときだった。偽物が尻を टीम 腰根につけて座り、両手を素早く静子の肩から腰へ移動させる。

「ああっ、それはいやあっ！」

静子はフレア人形の行動の意味を察して、必死に身をよじり、膝立ちの両脚をはたつがせ、両手の拳でアクシオン・フィギュアの顔を何度も殴る。腰身用に出った鋭いパンチがフレア人形の鼻やこめかみにぶち当たっても、すまし顔を崩すことはできない。ヒーロー映画のボスターの主人公のような表情のまま固まっている。

「私は人形の表情を変えるのを好かないんだよ。人形は常に最もいい表情であるべきだ」

アングル・ウォッチの目も瞬時した視線を聞く余裕は、今の静子にはなかった。フレア人形の腕力で腰を引っぱられて、そびえ立つ人造ベニスの上に移動させられている。ナノマシン脳のデータベースに体位の名前が閃いてしまっ。

（対面座位で犯される！）

静子の身体が押し下げられて、綿褥で絶頂を極めたばかりの女性器が亀頭に接近していく。

「いやあああ！ はうっつ！」

自分では見えなかったが、非常に異物絶頂を味わった女性器は、肉壁も唇口も全開のままになっていた。狙いすましたように唇口に亀頭が突入する。

「あっおあおあッ！」

そのまま人造肉褥を根もとまで呑みこまれて、尻がフレア人形の太腿に乗った。腰の中が偽りの男根で充満する。

「許さない！ 許さないッ！ ああああ、絶対に許さない！ 郷治おじさんを絶対に絶対に！」

大切な恋人を膣差した叔父への憤りを吐き散らす間にも、結果負けの官能がすぐさまフリーズされた。

「許さない、許さなあくっつ！ はあっ、あんなん、こんなの……」

恋人のまがいに物に奪められているのに、身体が勝手にあさましい反応をする。腰肉が緩みこじめた偽造ベニスをきゅっきゅっつと締めつけ、自ら悦びを搾り出した。

「ダメ！ 動いてはダメ！ あふっつっ！」

自分自身への叱責も、自分自身が無視をする。ひどりで尻が動きだし、大きく円を描いてうねる。男根に吸いつく淫肉が湯をくぐらうようにして、次々と新たな淫楽の火花が咲き誇った。

「ああっ、はうっつ！ こんな偽物なんか、気持ちよくないっ！ 全然気持ちよくないいいっ！ あっんなんん！」

フレア人形が腰を突き上げた。静子を抱えて、尻を軽々と高く跳ねさせる。白ハミスカートの裾をヒラヒラとひらめかせて、再びドーム屋根にすくと落ちる。機械ならではのパワーを発揮した降参だ。

「きゃおおおっっ！」

落下の衝撃が静子の全身に駆けめぐり、ナノマシン脳を沸騰させる。前後の乳房で一度イカされていた身体は、火山の大噴火に打ち上げられた小石のごとく絶頂の崖めへ吹き飛ばされた。

「気持ちよくないっ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！」

絶叫する静子を、アングル・ウォッチがじつと見つめて、二タニタと顔をいびつに歪ませた。

「すばらしいっ！ 私が人形にした静子ちゃんを私が造ったフレア人形がセックスして乗ってた！ これこそ私が夢見て、私が切望した、私の人形の世界だッ！ さあ、静子ちゃん、もっと素敵な人形の世界を見せるんだよ。」

「うるさいうるさいっ！ うるさああああ！ 郷治おじさんのためになんか、ひいおのおおっ！」

創造者の言葉に従い、フレア人形が責めたてる。暮えるこのないベニスで静子をえぐりながら、今度は下半身を力クカクと小刻みに動かした。静子の全身が上下して、首が前後に揺らされる。最初の爆発的な衝撃とは異なる、波が盛り上がったのは溺れるような快感が後から後から押し寄せてくる。

「あつ、やつ、いつ、ひ、いあああ！」

エクスタシーを極めたばかりの性感が、連続する波に溺れて翻弄される。大きくなる波頭で運ばれ、たちまち二度目の限界を突破してしまう。

「いやあ、イクッ!!」

それでもフレア人形は止まらない。大波が岩に激突して砕けるように二回目の絶頂。

「許さない、イクッ！ イクッ！」

人形は責めを知らない。高連の潮流が岩の縫間に流れこみ、高々と水柱を立ち上げるような四番目の頂上。

「許さないイクイクッッ！」

五回目、六回目、七回目……もはや途切れなき限界を超えつづける。

イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！ イクッ！

フレア人形が男根を腰の奥深くに埋めたまま、静子の身体のを反転させた。内臓がよじれて、また極まつてしまう。

イクッ！ イクッ！ イクッ！

静子とながったまま、フレア人形が立ち上がった。暮えることを知らない勃起の力で、静子の身体を持ち上げられ、立たされる。

「はああ、ふううんん……」

一人と一体は立つた女を後ろからベニスで責く背面立位、いわゆる立ちバックの体位になった。

「あ、あああ？」

アングル・ウォッチがウォッチランドのドーム屋根の上に乗って、脚を伸ばして座った。静子は腰腹とする意識の片隅で、叔父の体重で屋根が落ちて、下のウォッチランドにいる大勢の人々を押しつぶすのではないかと不安になる。幸いにもドーム屋根も、屋根を支える城壁も、揺るぎもない。

静子も屋根の強度よりも、叔父の姿に目を奪われた。アングル・ウォッチがズボンを脱いで、下半身は裸になっている。静子がフレア人形に犯されているのを羞しめながら、ズボンと下着を脱ぎ捨てたようだ。身体を機械化したと言っていたが、外見は普通の中年の男と変わらない。脂肪がついた腹の下から、響くと勃起した男根が静子へ向けられた。

「幸運にも、私の男性機能は研究所の爆発でも無事だったんだ。身体の一部を機械化した今も、ベニスと響くは天然ものだな。さあ、静子ちゃん、私の亀頭を舐めるんだよ。」

アングル・ウォッチが両手でおいでをすすり、フレア人形が足を動かして前へ進んだ。

「あひ、つあああ！」

静子は背後から押されて、フレア人形とながったまま前へ歩かされる。一歩二歩三歩と足を動かすたびに、腰内ベニスが角度を変えて、新たに鮮やかな快感が湧く。

「へあああ……うんん……」

フレア人形が足を止める。静子の目の前にアングル・ウォッチの勃起肉棒がある。客観的に見れば平凡なサイズかもしれないが、身長二十センチの静子の目には間髪では抱えきれない太い肉の柱だ。頭上には、剥けて赤黒く染まった亀頭が輝いている。

「プレイグレースの装甲をつけたまま、私のベニスにしがみつかれると痛いからね。もう静子ちゃんには装甲はいらないだろッ！」

静子の肩や両腕や背中、そして両膝から足先まで重う装甲がはらはらのパーツに分解して、足下に落ちた。素肌に着ている黒いボブ・スーツもいっしょに剥がされて、一糸まとわぬ裸にされる。

フレア人形が静子の腰を抱えて、ふわりと浮かび上がった。静子の足がドーム屋根を離れて上昇し、静の前にアングル・ウォッチの亀頭が来る。

「舐めるんだよ、静子ちゃん。」

「舐めるなんて、こんな大きなものをどうすれば。」

「早く舐めろと言ったら舐めろッ！」

静子がとまどうていると、いきなり皮膚を破られそうな歯をがつかれて、思わず両手で耳をふさいだ。今までの優しいおじさんめかした口調から、欲望を我慢できない支配者の語気になっている。いよいよ直接快楽を与えられるとなつて、アングル・ウォッチが本性を現した。

フレア人形に押されて、静子の全身がベニスに押しつけられる。顔面が亀頭の裏側のへこんだ部分に埋まり、目も鼻も口も、叔父の男肉でピッタリとふさがれる。

「んんんんっ！」

「熱い！」

顔の皮膚が火傷する、と感じた。実際に人間の体温がそれほど高熱のわけがない。自分の幻覚だとわかっていても熱く感じる。

熱とともに男の性器の臭いが、鼻腔をいっぱいにして、肺を満たした。小さくなっているためなのか、人間の体臭とは思えないほど強烈で、吐き気がこみ上げてくる。

「うううっ……えへっ……」

「もつと上だ。静子ちゃんの舌で指口を舐める。」

今度はフレア人形が動かない。また亀頭の向こうから感嘆された。
「自力で登るんだ」

しかたなく両手で亀頭をつかんで、ロッククライミングのように身体を引き上げた。手を滑らせると、背後のフレア人形の腕に身体を支えられるので、落下する心配はなかった。

首が亀頭のいい先端の上に出て、見下ろすアングル・ウォッチと目が合う。生身の眼球が凝っている目に、偏執的な炎が千々子と燃えている。

視線を下ろすと、眼前の亀頭の中心に縦の筋が走っている。

「そこだ！ そこに口をつけるんだ！」

「ああ……」

静子は両手で亀頭の側面にしがみつき、唇を鈴口に近づける。さっきよりもさらに激しい男の性根が鼻を襲った。

「ううう、気持ち悪い……」

「最初はキスをしろ！」

命令に従い唇を鈴口につけた。口と鈴口との奇妙すぎるキス。またしても胸の内て叫んだ。

「熱い！ 臭いっ！」

勃起してパンパンに膨らんだ亀頭に、アングル・ウォッチの全身の体熱が集中しているようだ。舌を伸ばして、鈴口の周囲に這わせる。臭いとともに、静子のナノマシン脳が蓄積する豊富な語彙にもない味が、舌を濡れさせた。



「んんっ、ううう、あふっ！」

背後のフレア人形が腰を突き上げてきた。腰に入ったままの人造ペニスで、また体内を強くかき乱される。

「ひゃうううっ！ 今はダメッ！」

「それでいい。静子ちゃんはこの人形と交わりながら私のペニスをしゃぶるんだ」

「そんな、はうっ！ んんっ！」

後ろからの突きに押されて、静子は腰を亀頭の先端に押しつけてしまっ。そのまま鈴口の内側に舌を這わせる。縮小された身体でなければできない性技だ。アングル・ウォッチの震音があふれた。

「おほおお、いいぞ！ それがいい！ 静子ちゃん、もっとやるんだ！」

「んっ、はうっ！ ああああ！」

後ろからおぼろしいフレアの偽物に責められながら、憎んでもあまりある叔父の巨大亀頭に腰を埋めて詰める。恥辱と屈辱の地獄に落ちとされながら、猛々しい快感が連続して背筋をせり上がっていく。

「静子ちゃん、『惣治おじさん、愛してる』と言った」

「そんなこと、言えない！ はうっ！ あああ、絶対に言わない！」

「静子ちゃんが言ってくれないと、下にいるモラーロード君にウォッチランドの住人を殺戮させるぞ。最初はユドル市長の目の前で、孫ということになっている女の子を八つ裂きだす」

「ひでいー」

「言え！ 『惣治おじさん、愛してる』と言ったわ！」

今にも切れそうな叔父の形相を目にして、本気だとわかった。アングル・ウォッチは腰を殺すことも躊躇しない人間だとはつきりと理解できた。今は怪に執着していても、いつでも手平で殺すだろう。

「ああ、今、聞くしかない」

静子は決意して、長年の疑念を聞いたでした。

「言います。言いますから、その前に教えて、父さんを死なせたのは」

「こんな大事なときにも、フレア人形が人工男根を叩きつけてくる。」

「あひいっ！ ご、惣治おじさんですか？」

ウラツチミ下の地門が開いた。出てきたテニールトが怒鳴

「おい。なにがおかしいぞ、どうなっている」

静子はローズデバイスアーマーに指示を送った。アーマーの左腕が肘から分離して空を飛び、テラーロッドを床からつまみ上げた。そのままドーム屋根の上の静子の前に飛んでくる。

テラーロッドは今もまだ二センチあまり。対する静子は二十センチ。

それでもテラーロッドは静子を見上げて、傲慢に言い放った。

「きさま、なにをしたんだ。こうなうたらぶつ殺して、おわっ！」

静子は無言で自分の十分の一サイズのテラーロッドをつかみ上げ、つかつかとアングル・ウォッチの血まみれの脇間に近づいた。

「なにをする！ 離せ！ うわあああああ」

ツッポツ！ ウニユウ！

テラーロッドを黒い鋼線を先にして、アングル・ウォッチの肛門に押しこんだ。反射的に肛門括約筋が締まり、黒い甲冑の足の先まで尻の中に吞みこまれて、殺人鬼の全身が叔父の尻の内部に消える。

「これが本当のくそくらえです」

静子は鋼線を叔父の肛門から、たなすむフレア人形へ向けた。

ローズデバイスアーマーの右腰から収納されている銃が現れ、腰にマウントしたまま、視線を的にしてレーザーを放った。

フレア人形が一瞬で燃え上がり、本人そっくりの姿面が溶けて、中の機械が粉砕される。

（あたしがフレアの偽物と交わったことは、絶対に秘密にしておくはならないわ）

☆

秘密基地の管理システムを支配した静子の働きによって、アングル・ウォッチとテラーロッドをはじめとして基地にいた犯罪組織の構成員たちは、それぞれの部屋に閉じこめられて無力化され、捕縛された。

フレア、スターサダー、オセロットはマンフライ部隊から解放された。

ウォッチランドの住民にされていた人々は、緊急入院したアングル・ウォッチの助手たちによってもとの大きさに戻され、与えられていた記憶記憶を消去された。それと同時にウォッチランドにいたきこは記憶から消えたために、誰一人として静子の名前も縁も覚えていなかったのは、静子にとって幸いだった。また瀧澤郷治が静子を捕える計画は組織に無断で行ったプライベートなもので、

静子がローズデバイスだということは組織の誰にも教えず、警察にも告げなかった。後に面会に行った静子に、瀧澤は「家族だけの秘密だからね」と囁いてニヤニヤ笑った。

静子心配したテラーロッドのコンピューターを操る能力は、限定的なもので、現在のネットを支配できるようなものではなかった。

警察の調査によりアングル・ウォッチと瀧澤郷治が研究所時代から協力していた犯罪組織が、アメリカの巨大組織犯罪国家たわわり、秘密基地から得られた情報をもとに警察庁とFBI合同で捜査がはじまっている。

クラウドとセリト

☆

静子はローズデバイスの家で警察での証言を終え、公衆トイレの個室で北原静子に戻り、銀座でちょっとお馬めのカラスのオアシエを購入した。

サンダークラップスの自宅兼基地に戻ると、オアシエを予定通りに自分の私室の棚に置いた。窓からの陽光を受けて、細み合わさった大小の面々が複雑に反射させる。

「こいつアトはよくわからないけど、これはきれいね」

並んでオアシエをながめる日向燐の言葉に、静子はうれしそうに答えた。

「これを貰ったときウォッチランド事件ははじまった。後始末で忙しかつたけれど、やっと買ったことができた」

二人で並んでカラスの輝きを見つめるうちに、静子は燐の手を握り、無言でキスを求める表情になる。

燐はすぐに笑って、面を静子の唇に重ねた。

